

TMK ミライデザインプロジェクト

玉城町 令和3年度 第17号

玉城町明るい未来づくりに関する調査研究業務報告書



皇學館大学教育開発センター 准教授 池山敦

令和4年3月

はじめに

「コロナウィルスによる新型肺炎のニュースが世間を騒がせ、週明けより公立学校の休校の検討が行われている頃にこれを書いている。」

これが昨年提出した報告書の書き出しであった。あれから1年。これを書いている現在での国内の感染者数累計は実に440,580人となった。我が三重県では2,567人である(NHK2021)。新型感染症は我々の社会生活の多くの面に影響を与えた。それは、経済面であり、人と人のつながりの面でもあった。昨年からの1年間の間に2度の緊急事態宣言の発令を経て、会食の自粛要請、県境を超える移動の自粛要請などが数次に渡り行われ、我々の関心のあるところでは自治会などの地域の行事の多くが縮小、あるいは中止を余儀なくされた。ハリネズミのつがいはお互いの針で傷つけ合わない適切な距離を見つけるというが、私達も「ソーシャル」な距離を測りあった一年間であった。

この囲みの部分は、昨年の本事業における報告書の書き出しであった。本稿を書いている令和4年3月7日現在で最新の新規陽性者数は昨日6日一日で556件であり¹、同日現在での国内感染者数の累計は実に、5,402,681人であり、この一年の間に10倍以上となった²。死者数は累計で24,951人である。この年での「新型コロナウイルス感染症」による死亡数は3,466で、10万人あたりの死亡率は2.8だという。ちなみに、同年における悪性新生物(腫瘍)による死亡数は378,356人であり、死亡率は307.0である³。このことから、ただちに新型コロナウイルスの脅威を図ることはできないが、いずれにせよこの新型の感染症がなければ失われなかった多くの命が失われていることに変わりはなく、一つの命の重さはいつも地球よりも重い。

ウイルスのミクロの世界が、マクロの世界で地球規模に大きな影響を与える一方で、世界情勢はロシアのウクライナ侵攻により予断を許さない状況にある。本年2月24日にロシア軍がウクライナに侵攻した。まさに、現在進行の危機で、本日現在も両国において和平が模索されながらも、侵攻は止まっていない。報道によるとウクライナ側の民間人2,000人以上が死亡したとされ、100万人以上の難民が出ているという⁴。多くの罪のない市民の命が失われている今、上述の通りその生命が地球よりも重いのであるならば、地球はその命の重さとともにバランスを崩し、どこかへ沈下してしまうのかもしれない。

そんな複雑極まる社会、世界情勢の中で今年も本事業を実施できたことをまずは喜ぶたい。そして、われわれは少なくとも新型コロナウイルスとの共存の生活が続く中で、少しは

¹ https://www.pref.mie.lg.jp/YAKUMUS/HP/m0068000066_00062.htm

² <https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/data-all/>

³ <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai20/dl/gaikyouR2.pdf>

⁴ <https://www.jiji.com/jc/article?k=2022030301001&g=int>

学び、前に進めたと思いたい。今年度においては、感染のいわゆる「波」の合間をぬい、ほぼすべて予定通りに事業を行うことができた。オンラインや新しい生活様式を組み合わせ、なるべくこれまでの生活に近づけていくこの試みを新型コロナウイルスへのわれわれからのメッセージとしたい。

令和4年3月
皇學館大学教育開発センター
准教授 池山敦

(1) プロジェクトの背景（野篠地区）

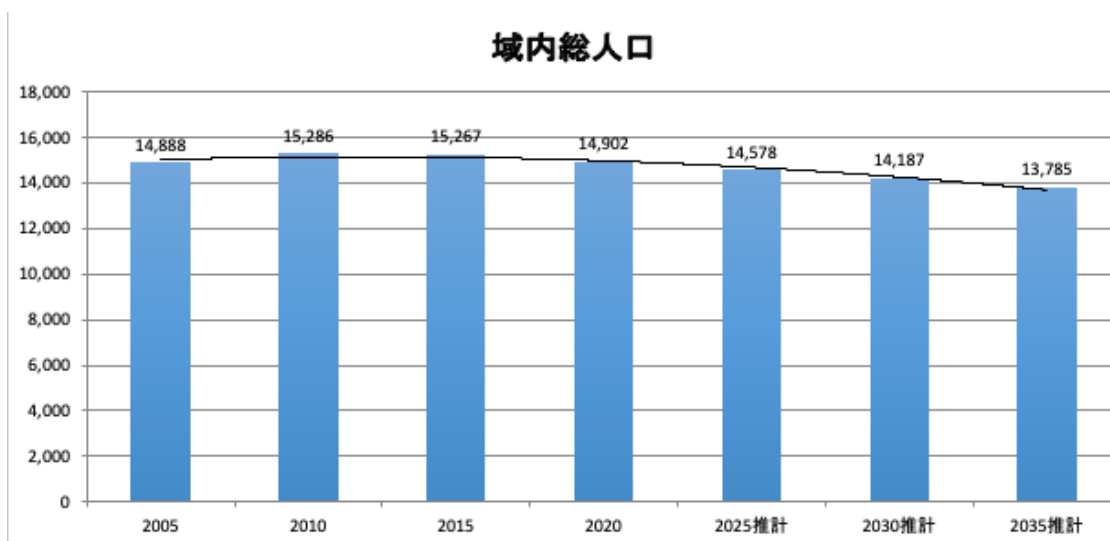


図 1 総人口推移（国勢調査より、報告者作成）

玉城町は三重県の中ほどに位置する人口約 1 万 5 千人の町であり、昭和の合併で 1 町（田丸町）3 村（東外城田村、下外城田村、有田村）が合併して現在の姿となっている。その 1 町 3 村はそのまま小学校区として現存しており、町を大きく 4 つに分けるエリアとして町民に現在も認識されている。平成の時代においては合併を行わず、単独で現在に至っている。農業が盛んな町であり、田丸城址をいただく歴史豊かな町でもある。近年、久野家の家老であった金森得水の手による「旧金森別邸玄甲舎（茶室）」の修復が完了し、庭園整備及び集客観光施設が完成し、観光資源としても期待がされている。なお、玄甲舎は令和 2 年 6 月から一般公開されている¹。

さて、昨年度の報告書で「未だ発表されていない」としていた令和 2 年国勢調査の小地域集計が令和 4 年 2 月 10 日に総務省統計局より発表された。データをダウンロードして、報告者においてコーホート変化率法²により玉城町全体の人口の将来における推計を行ったものが図 1 である。2010 年頃にピークを打った玉城町の総人口はその後減少側面に入り、2020 年の国勢調査では 14,902 人であった。ピークであったと考えられる 2010 年より 384 人の減少であった。そして、将来の推計については報告者の推計では、2035 年には 13,785 人となり、2020 年からみると 1,117 人の減少となる推計となった。後に詳しく述べるが、コーホート変化率法は、現在の年齢区分別の人口の変化がこのまま継続すると仮定しての計算法であり、誤差を多く含む可能性があ

¹ <https://kizuna.town.tamaki.mie.jp/sangyokanko/kanko/genkosha.html>

² コーホート変化率の方については、次のサイト等を参照のこと。
https://www.pref.mie.lg.jp/DATABOX/000217003_00011.htm

ることを予めお断りしておく。

さて、本プロジェクトは平成 30 年に「下外城田地区明るい未来づくりに関する調査研究業務」としてスタートし、初年度に下外城田小学校区内の岩出地区、宮古地区においてワークショップ等を行った。翌令和元年度には同じく下外城田小学校区内の小社、曽根、山岡、昼田地区において実施した。そして昨年度より事業名が「玉城町明るい未来づくりに関する調査研究業務」と改められ、対象範囲を下外城田地区に限定

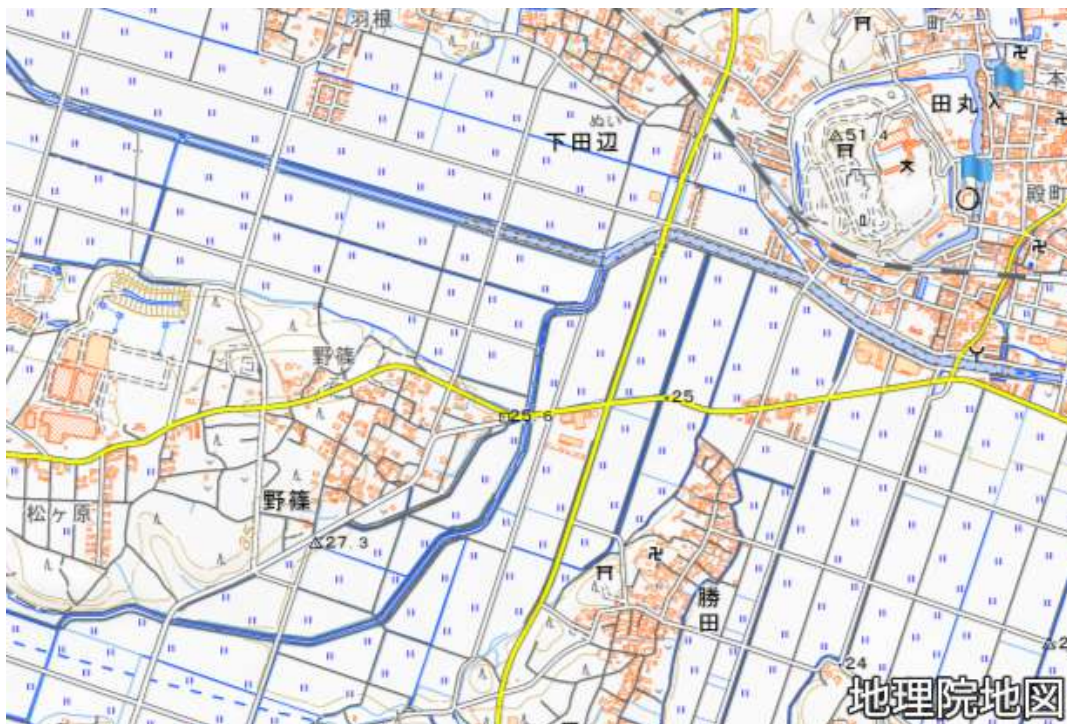


図2 野篠地区

せず、玉城町全域に広げた上で、実施地区が選定され外城田小学校区にある山神地区で実施することとなった。本年度は山神地区では後に紹介するまちづくりアンケートを実施し、ワークショップなどの活動は同じく外城田地区にある野篠（のじの）地区におじゃますることになった。野篠地区の地図を図2に示す。

野篠は、「伊勢平野南部、外城田川とその支流三郷川に挟まれた地域に位置する。地名の由来は、湿地・沼地の意味の「ノチ」から「ノチノ」と転じ、野篠といわれるようになった」とされ、古くは馬を育てていたという。江戸期以降は野篠村といわれ明治 17 年には外城田地域の連合戸長役場が置かれた³。熊野古道伊勢路出立後である田丸から出てまもなくに位置し、追分に常夜灯が今も残っている。そんな野篠地区を今年度は本研究のフィールドとすることになった。

³ 「角川日本地名大辞典」編纂委員会、竹内理三、編. 1983. 角川日本地名大辞典 24：三重県、角川書店.

(2) 地域課題の「見える化」の取り組み（野篠地区）

① 背景

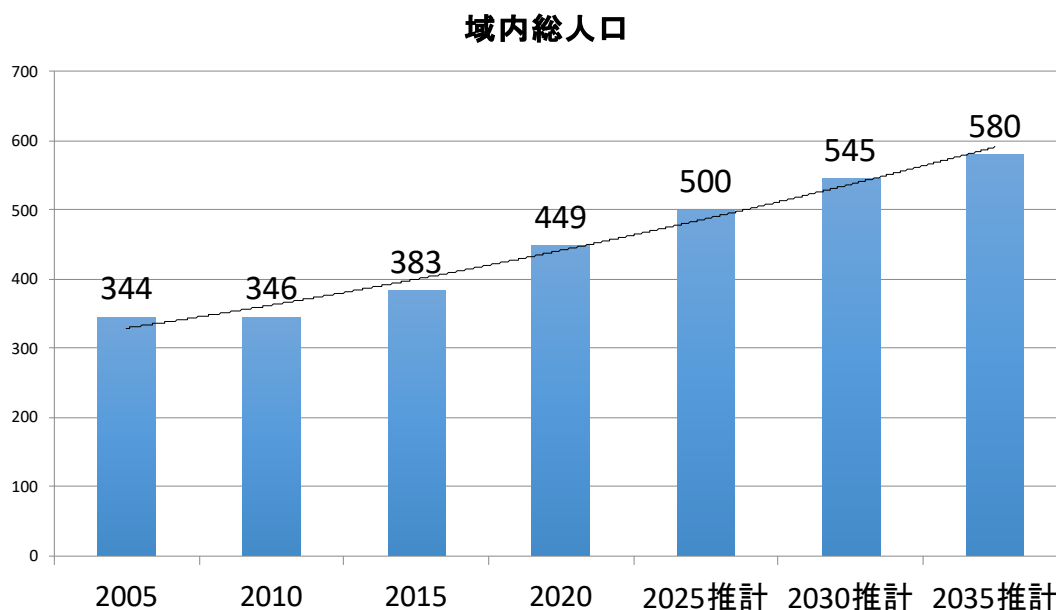


図3 野篠地区の人口推計

野篠地区における人口につき国勢調査の「町丁・字等別集計（小地域集計）」を元に将来人口推計等を試みた。町丁・字別等集計は、地域の現状を知るために貴重な情報であるが、野篠地区は実数が300～500人程度の小さな集落であるため、将来推計にはかなりの誤差が含まれる可能性があることを予めお断りしておく。

推計などに関する計算方法は昨年度までと同じであり、（半澤ら2016）⁴を参考にコーホート変化率法を用い、国勢調査より2005年、2010年、2015年、2020年のデータを用いている。各コーホートの変化率の算定には4データの平均値を用いなるべく平準化を試みた。出生数については、地域の若年女性（20～39歳）人口と0～4歳の比率を使い、これも4つのデータの平均値を使用している。また、出生男女比については一般的な51：49としており、地域における出生性差は考えていない。結果はグラフのとおりである。今回は、近年では極めて珍しい結果となった。第1には野篠地区は地方の現状において珍しい、人口増加エリアであった。実測値で、2005年の344人に対して、2020年に449人であり105人、30.5%の増加であった。前述の通り、コーホート変化率法ではこの増加が続くことを仮定したものであり、当然今後も人口が増加し続ける推計となっている。このような状況の理由はどこにあるのだろうか。次の2枚の航空写真の比較の中にその答えがありそうである。

⁴ 半澤誠司，武者忠彦，近藤章夫，濱田博之. (2016). 地域分析ハンドブック Excelによる図表づくりの道具箱. 京都市：ナカニシヤ出版.

2 枚の航空写真はそれぞれ、国土地理院提供のもの⁵であるが、上の図 4 が報告者らが幼少期を過ごした 1970 年代、下の図 5 が 2020 年のものである。



図 4 1974～1978 年



図 5 2020 年 9 月

2 枚を見比べてみると、特徴的な V の字を横にしたようないわゆる「追分」の地形の間に形成された野篠集落が、この 50 年ほどの間に、スプロールし、追分の街道の外側に住宅が形成されているとともに、V 字の内側の住宅も増えていることがわかる。これらのことにより野篠地区は近年人口が増加したと考えられる。図 6 は 2015 年から 2020 年のコーホート別⁶・男女別の人口の増減を示したものであるが、ほぼ全

⁵<https://maps.gsi.go.jp/#17/34.485176/136.616089/&ls=ort%7Cgazo1%7Cseamlessphoto&blend=00&disp=001&lcd=seamlessphoto&vs=c1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1&d=m>

⁶ 『『コーホート』とは、ある期間に出生・婚姻等何らかの事象が発生した人を集団としてとらえたものであり、出生によるものを『出生コーホート』と呼ぶ。』

世代に渡り転入超過の状況が見て取れる。

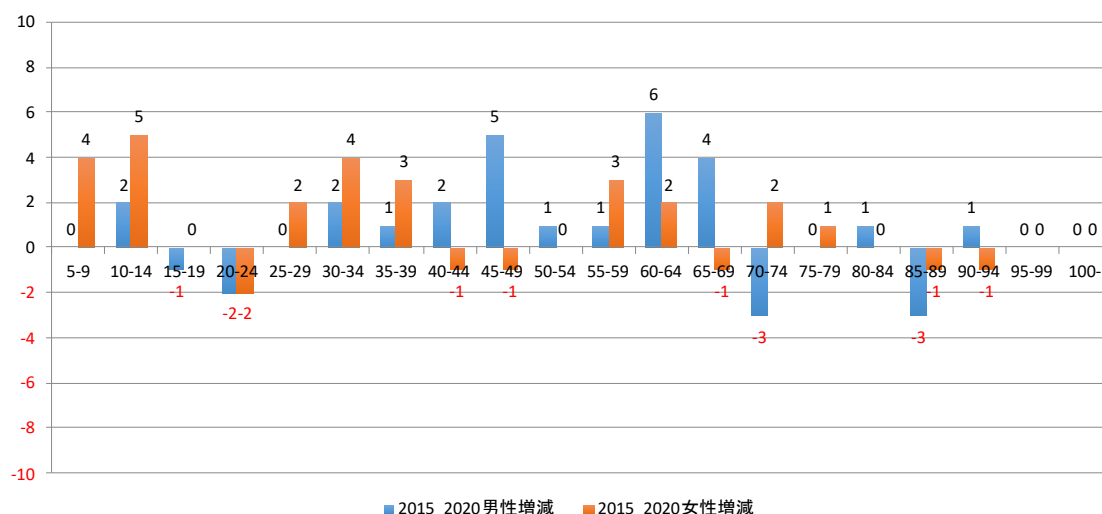


図6 野路の地区の2015年から2020年のコーホート別人口増減



図7 治水地形分類図

これまで、本プロジェクトでは人口減少にある集落について、これからどうしていくか、ということにつき、地域課題を学び、地域資源を発見することを通して地域住民が話し合い、自己決定をしていくことを支援することを目的としてきた。一見その点から考えると、ここにはプロジェクトの意義が見いだせないかと

も思える。しかし実は、野篠地区にはこの特殊事情に基づく、この地区ならではの悩みがあったのである。

それは、前述の通り、新規住民が一定数流入してきたことにより数字上は人口が増加しており将来安泰であるかという点、そう単純ではなく新旧住民の交わりが少なく、連帯がうまく取れてはいないという状況が現地の地域の役員の方への聞き取りにより判明していた。よって、本年度は地域課題・地域資源発見により「新旧住民の接点づくり」ということも目的の一つとしてプログラムを構成していった。

野篠地区は治水地形分類図によると、段丘⁷に分類され（図7）比較的自然災害のり

<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/tokusyuu/syussyo-4/syussyo2-2.html>

⁷ 『『台地・段丘』土地の成り立ち 周囲より階段状に高くなった平坦な土地。周囲が侵



図8 玉城町土砂災害・ため池ハザードマップ
(抜粋)

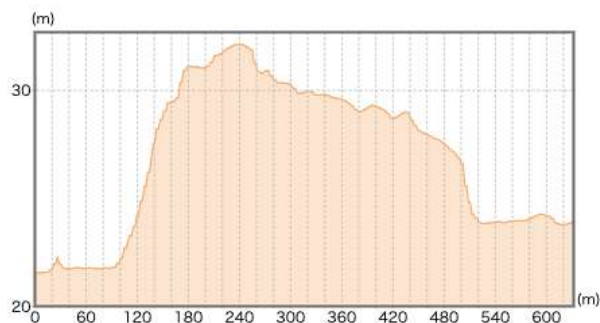


図9 野篠集落の断面図

GIS は Geographic Information System の略であり地理情報をレイヤーとして重ねる

ことができる。後に述べる地形模型への情報のプロジェクションマッピングの際のデータ作成にも GIS を活用しており、報告者の研究室では具体的には ESRI の ArcGIS Pro を利用している。

スクが少ない地形とされているが、旧集落をベースに今後も引き続きスプロールしていく場合には、段丘の外側に市街地が拡張していくことも考えられる。

図8は玉城町のため池ハザードマップの抜粋⁸であるが、大規模地震などによるため池の堤の決壊による浸水区域に地区の辺縁部が一部さらされていることがわかる。図9は地理院地図の機能を使って作った野篠地区の断面図であるが、段丘の頂点を中心に、前後において標高が大きく下がっていることがわかる。この点に関して防災面での住民の理解、及び相互の協力は今後不可欠であり、そういった意味でも新旧住民の協力が欠かせない。

このように、本研究の基本コンセプトとして「地域課題の見える化」があり、本年度も地域課題、特に地理情報の解析及び図示のために GIS ソフトを活用してきた。

ことにより図示し、あるいはその地理情報をシステム内で解析する

食により削られて取り残されてできる。この地形の自然災害リスク 河川氾濫のリスクはほとんどないが、河川との高さが小さい場合には注意。縁辺部の斜面近くでは崖崩れに注意。地盤は良く、地震の揺れや液状化のリスクは小さい」(国土地理院)

⁸ <https://kizuna.town.tamaki.mie.jp/bosaibohan/bosai/documents/P15-16.pdf>

② 住民ワークショップの実施

詳しい情報は、巻末のワークショップ⁹報告に譲るが、上述のような背景を考慮し、野篠地区において WS を実施した。それは、大きくは「地形模型 WS」と「地域課題見える化・まちあるき WS」の2回で、それぞれ表1のような目的であった。

表1 WS の内容・目的

WS の種類	内容・目的
地形模型 WS	地形模型をもとに、住民各自が持っている情報（歴史、文化、自宅、生活等）を模型上にプロットすることにより、地域の現状や資源、課題を空間的に把握、共有する。
地域課題見える化 WS	アプリ、地形模型や航空写真等をもとに地域空間における地域課題を見える化し、共有するとともに住民同士の対話を行う。
まちあるき WS	新旧住民、高齢者、大人と子供が実際に地域を歩くことで、地域資源を改めて発見し、対話を行うことで連帯を強化する。

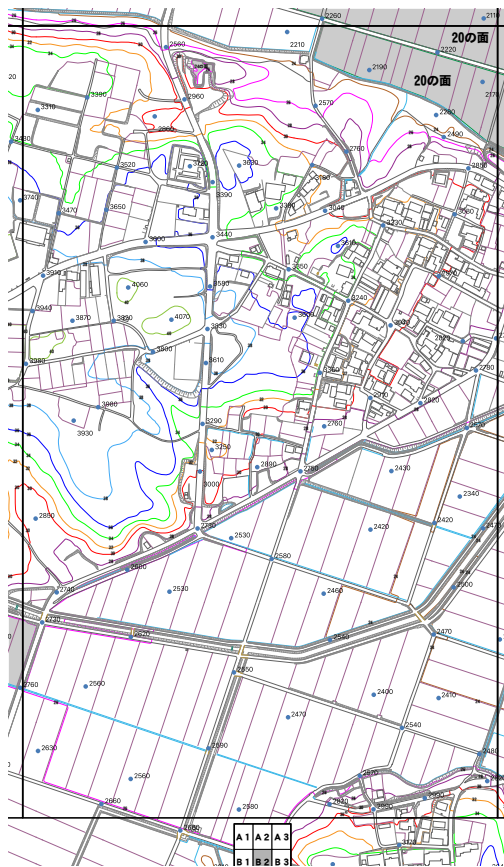
A) 地形模型 WS



図 10 模型作成風景

地形模型 WS において使用する模型については模型については、野篠地区を 1/1,000 のスケールで再現した。等高線ピッチは 2 m（2 m の高低差が模型上で 2 mm となる）とした。模型の設計と技術アドバイスを委託している合同会社人・まち・住まい研究所の協力により完成させることができた。また、制作にあたっ

⁹ 以下、WS と省略する。



ては研究補助アルバイト¹⁰の皇學館大学生の努力がなくては完成しなかった。ここに感謝を申し上げる。実は令和元年度までは、完成間近の模型をもとに子どもたちにも作業をしてもらい模型を完成させるプロセスを経ていたが、新型コロナ感染拡大の波の中で、その部分については開催中止とせざるを得なかった。

令和3年10月2日に模型WSを実施した。野篠公民館にて開催し、子供14名、大人16名にお集まりいただいた。450人程度の集落であることを考えると人口の10%近くにお集まりいただいたことになる。

地形模型WSでは、予め野篠地区を校区に持つ外城田小学校にご協力をいただき、該当地区在住の児童に募集チラシをくばっていただいた。チラシの裏面には、子ど



1



2

図 12 子ども対象募集チラシ

¹⁰ 模型作成期間は、三重県下に緊急事態宣言が発出されていた期間であったため、皇學館大学におけるコロナ対策ルールに則り、マスクの着用、手指消毒の徹底、健康観察書類の備置など感染症対策に十分配慮しながら作業を実施した。写真でもソーシャルディスタンスをとった上での作業であることがわかる。



図 12 自宅を探す

より、地域空間に関心をもたせること、②旧住民が子供及びその保護者の新住民とプロットする場所を探すことにより、地域内での相互認知が行われること、である。

自宅をプロットする前に、地域の役員、長老に事前に集ってもらい、地域資源をカードに書き出してもらった。そこには、田に水を引く「湯ぜき」や、地域の神様を祀った祠などが書き出された。それをスタンドにセットし地域の皆さんに事前に

もたちに自分の家や家族の絵を書いてもらい、それを当日持ち寄って模型の上にクリップ付きのスタンドをたて、そこにプロットすることとした（図 12）。

この事の狙いは 2 つあった。①子どもたちが模型の中に自分の絵をプロットするときに、野篠地区の地形の中での自宅の位置を探すことに

模型上にプロットしていただいた。子どもたちはそれを手がかりに自宅を探すという仕掛けとした。

もう一つ相互認知を促す仕掛けとして、参加いただいた参加者のみなさんを、WS の過程のなかでお一人ずつインスタントカメラで写真に撮らせていただいた。子どもに関しては、持ち寄



図 12 インスタントカメラによる写真

ったイラストも一緒に写ってもらった。それを会場内に設置したボードに掲示し、だれが参加してくれたかを可視化するとともに、このボードは公民館に残置し、地域の皆さんの相互認知に役立ててもらうことにした。今後、写真を見れば「この子はあそこの家の子供か」ということがわかることを狙った。また、WS は一斉に集合するのではなく、時間を決めて予約制として感染症対策面で工夫した。

B) 地域課題見える化 WS



図 12 アプリ「マチシルクエスト」



図 13 タイトル画面

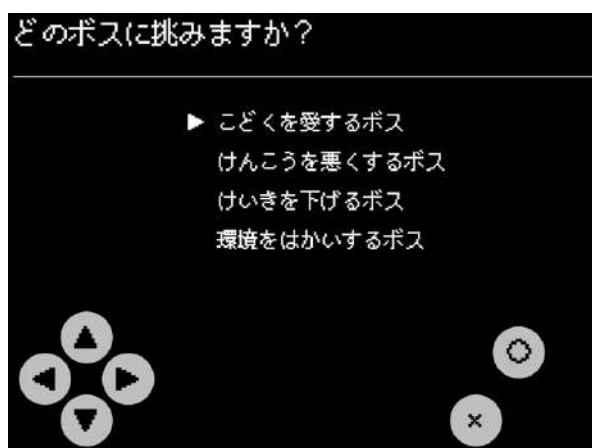


図 14 ボス選択機能

次に地域課題見える化 WS を実施した。これは後に述べる「まちあるき WS」と同時開催で、令和 3 年 11 月 21 日に実施した。WS では、本プロジェクトの為に作成、アップデートを重ねてきた地域課題学習アプリ「マチシルクエスト」をプレイすること（本稿のアプリ画面キャプチャ画像等は全て小山ら 2021¹¹による）と、及び地形模型への GIS による地理情報の投影を行った。

これまでに開発してきた地域課題の見える化アプリ「マチシルクエスト」はバージョンアップを重ね、現在では「マチシルクエスト III」となっている。アプリの詳細な説明は過去の報告書をご参照いただくこととしたい。「『マチシルクエスト』は、ロールプレイングゲーム (RPG) 風の会話を通じてユーザに地域課題を伝えるシステムである。本システムは、三重県度会郡玉城町をモチーフにしたマップ上にランダムに非プレイヤーキャラクター (NPC) を配置する。NPC には、事前に住民から得たアンケート結果から、浮き彫りになった地域課題を織り交ぜた会話を設定する。ユーザは主人公を操作し NPC に話しかけることで、その町の現状をゲーム感覚で知ることができる。また、NPC との会話にかかった時間などを

¹¹ 小山航輝, 中井一文, 伊藤純子, 池山敦. (2020). 地域課題の現状を可視化するシステムの構築. 情報処理学会研究報告.

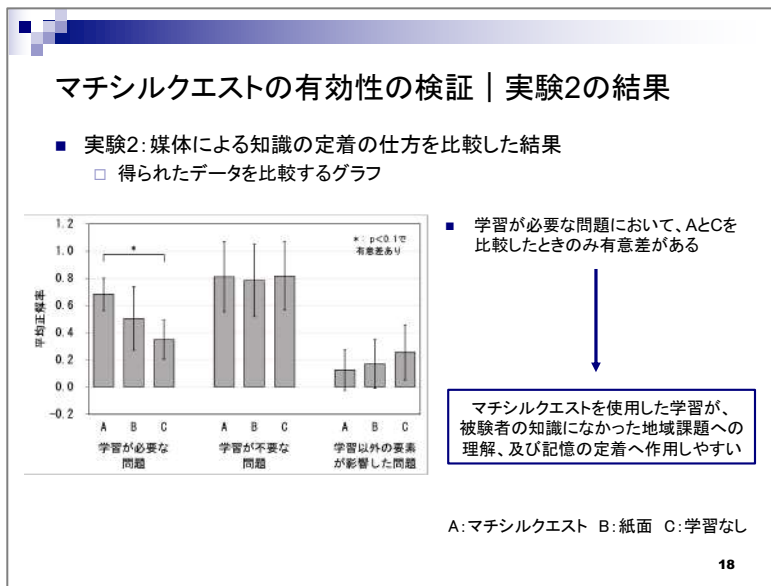


図 15 小山のマチシルクエストの学習効果の検証
(小山 2022)

話することで、地域課題について学ぶことができるというものである。キャラクターが話す地域課題については、出典のデータを同時に表示することにして、地域住民の地域課題を学ぶための社会教育教材として活用できるものとしている。主人公は玉城町内を探検し、様々な登場人物と会話をし、町の現状や地域課題について学ぶ。そして、ボスとの対決においてはその学んだ内容に関するクイズが出題され、規定数を正解するとボスを倒せるという物語である。

この社会教育プログラムとしてのアプリ活用の効果に関して、その後、小山の検証により、地域課題についての「学習が必要な問題」において、「マチシルクエストを使用した学習が、被験者の知識になかった地域課題への理解、及び記憶の定着へ作用しやすい」ことが明らかにされた (小山 2022) ¹²。

保存する仕組みによってプレイデータの収集も行うことができる。テレビゲームや携帯ゲーム機の普及により、RPG 風のシステムはワークショップに参加する幅広い年齢層のユーザが利用することに適している」(前出、小山ら 2021)。

つまりこのアプリは、おまかにはロールプレイングゲーム (RPG) の舞台が玉城町、主人公は自分自身となり、玉城町の中を歩き回り、キャラクターと会

¹² 小山航輝,「地域課題解決を促進するシステムの開発及び有効性の検証」.令和 3 年度第 3 ブロック専攻科研究フォーラム.2022 年 2 月発表資料より

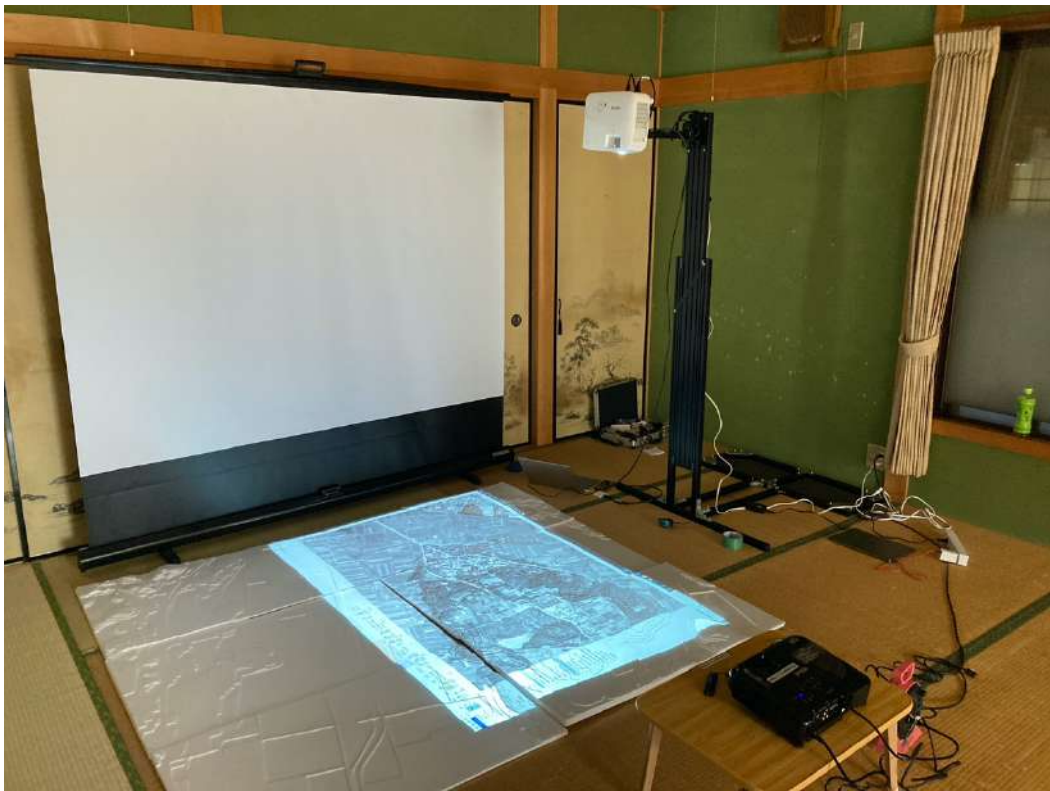


図 16 地形模型へのプロジェクションマッピング

続いて、地域課題の見える化として、これまでも本研究では地理情報を地形模型に投影することにより、立体視を可能とし地域情報のさらなる「見える化」に取り組んできた。過去には、超単焦点のプロジェクターを使用したり、単焦点のプロジェクターのマウント一式をワンオフで自作したりし、研究を重ねてきた。現在では、写真のスタンドを利用することで安定してプロジェクションマッピングを行うことができる。このスタンドの開発・制作にはエムイーシーテクノ株式会社中谷裕一氏に多大なるご協力をいただいた。

令和3年11月に野篠地区で実施したWSではプロジェクションマッピングによる実演を行ったところ、とても熱心にご議論をいただいた。前述の通り、ため池ハザードマップを投影することで、浸水エリアの確認などを行った。

他には、前述の治水地形分類図や過去の航空写真と現在の航空写真を投影し、その比較などを行った。現在使用しているデータセットの多くは誰でもインターネット上からダウンロードできるものである。通常、GISソフトで取り扱えるデータには地球上の座標などの位置情報がセットとなって記録されている必要がある。しかし、ハザードマップのPDFデータには位置情報が記録されていないため、一旦ArcGIS¹³に読み込み、「ジオリファレンス」といわれる作業を行うことで、他のデータと地図上の位置を一致させることができた。見える化WSの開催概要については、巻末の

¹³ ArcGIS は ESRI 社により提供される GIS ソフトウェアである。

資料を参照いただきたい。

C) まちあるき



図 16 まちあるきシート



図 17、18、19 まちあるきの様子



図 20 参加募集チラシ

チラシである。

(3) まちづくりアンケート

項目	内容
地域	山神地区
世帯数	61 世帯
対象	中学生以上男女
回収数/配布数	82/152 (53.9%)

表 2 まちづくりアンケート概要

回収を行った。概要は表 1 の通りである。

地域課題見える化 WS と同時開催¹⁴で地域のまちあるきを行った。事前に野篠自治区¹⁵の役員の方と、模型 WS の結果をもとに打ち合わせを行い、まちあるきによりめぐるチェックポイントを 5 箇所設定した。まちあるきには地域の古老の方にもご同行願ひ、チェックポイントにおいて子どもたちに、その場所について名称や「いわれ」などをご説明いただいた。子どもたちは、そこでしっかりと説明を聞き、ワークシートにその場所の名称を記入する。最後に公民館に戻ったら、答え合わせにおいて正解すると参加賞のお菓子の詰め合わせがもらえるという仕組みにした (図 16)。

図 17~19 の写真のように、小さい子どもも保護者とともに参加し、天気にも恵まれ有意義な行事となった。開催についての詳細は巻末の資料を参照いただきたい。図 20 は参加者募集の

本研究では昨年度までに支援を行った山神地区において中学生以上の住民全員を対象とする「まちづくりアンケート」調査を実施した。設問は資料編に添付している質問用紙を参照されたい。

過去には研究アルバイト学生とともに訪問し留置法により調コロナウイルスの感染拡大に配慮し、郵送により配布し、郵送により

¹⁴ マチシルクエストのプレイの後にまちあるきを行い、戻ったあと休憩しながらプロジェクトマップの実演と対話を行った。

¹⁵ 玉城町ではいわゆる地域自治会を「自治区」と呼称している。自治区と自治会はほぼ同じものである。

A) 日常生活における困りごと

本年度は山神地区においてまちづくりアンケートを実施し、表2の通りの概要であったが、小さな集落であるため、集落単体での結果の掘り下げということよりも、前年度までに実施した地域との比較を中心に分析を行った。これまでに調査を行った地域は表3のとおりである。

調査年度	地区
令和2年度	小社、曽根、山岡、昼田
令和元年度	宮古、岩出

表3 過去のまちづくりアンケート

設問の中に「日常生活において不安に感じていること、困っていることはありますか？当てはまるものをいくつでもお答えください。」という設問がある。具体的な設問項目は図22のとおりである。その設問

に対する回答につき比較したときに、今回の調査対象である山神地区に特徴的な回答が3つあった。それぞれ見ていく。

まずひとつ目は、選択肢6の健康面への不安である。地域の高齢化および今後のその対策を考える際に、地域住民の健康度は大きなファクターであるといえる。図21

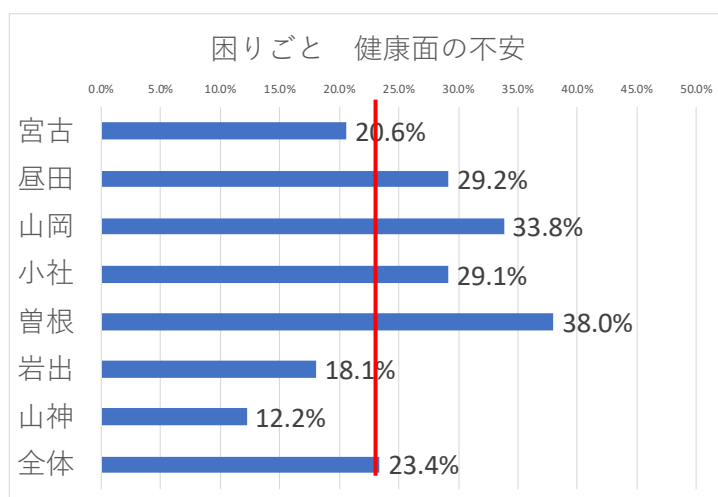


図21 困りごと 健康面の不安

は困りごと・不安について、健康面の不安があると答えた回答者の割合¹⁶を地区別に比較したものである。赤い線が7地区全体の回答者の比率を表している。7地区の中で山神地区はもっとも健康面の不安があると回答した回答者の比率が低かった。当然、高齢になれば健康面の不安を感じることも多く

なることが想定されるため、各地域の回答者の年齢を確認したところ、図23に示すように山神地区の回答者は他地区に比べて、年齢が高い傾向こそあれ、若い世代が多かったとはいえない。図では、全体において60歳以上の回答者の比率のところに赤い線を引いているが、山神地区は全体よりも高齢であるといえる。

このような点から、山神地区の住民の健康状態は良好である事が考えられる¹⁷。

¹⁶ 設問は「いくつでも」という形での複数回答となっている。

¹⁷ 「健康面の不安を感じていない」ということは、必ずしも「健康である」とはイコールでないかもしれない。

問 06 日常生活について不安に感じていること、困っていることはありますか？当てはまるものいくつかでもお答えください。

1. 食事作り、洗濯、ゴミ出し等の日常生活のこと
2. 庭作業（草取り）、電球の交換等の軽作業のこと
3. 農地、山林の維持管理に関すること
4. 日常的な相談をする相手がいないこと
5. 看病や世話をしてくれる人がいないこと
6. 健康面への不安があること
7. 緊急時の相談先になってくれる人がいないこと
8. 災害への備えや避難に関すること
9. 自家用車の運転に不安があること
10. 買い物・通院等の移動手段（交通手段）のこと
11. 生活道路等の環境整備に関すること
12. 食品・生活用品の買い物に関すること
13. 身近に預貯金を引き出せる金融機関がないこと
14. 福祉サービス（デイサービス・介護施設）等に関すること
15. 病院までの距離等、地区の医療体制に関すること
16. 子育て環境に関すること
17. 仲間と気軽に集まる場所がないこと
18. 学校が遠く、通学が不便であること
19. 小学校が少人数であり、学習面での競争が少ないこと
20. 進学に関すること
21. 結婚に関すること
22. 仕事、雇用、就職に関すること
23. その他（ ）



いつでも
お答えください

図22 日常生活の不安、困りごと

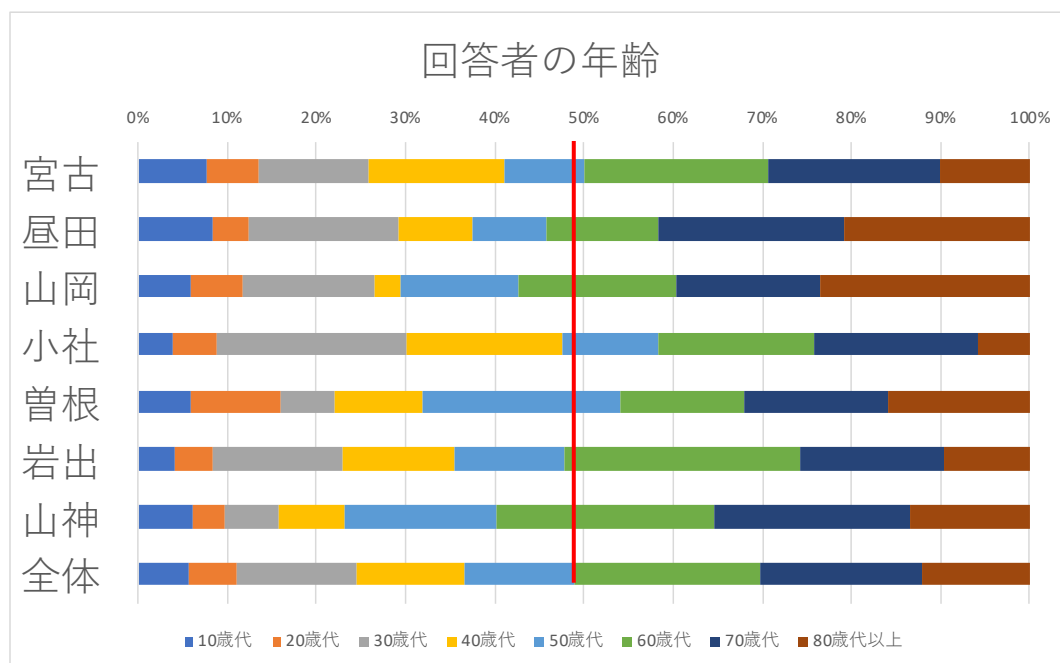


図 23 回答者の年齢

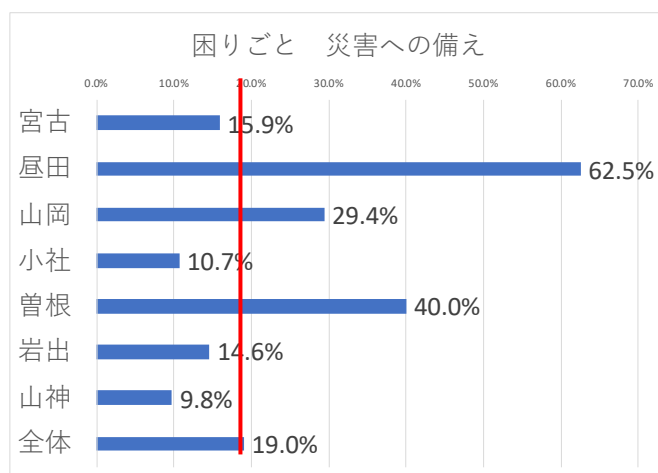


図 24 困りごと 災害への備えや避難

続いての特徴的な困りごと
の項目として「災害への備え」をあげる。昨年度の報告書でも詳述したとおり、山神地区における災害の想定は地震動などによる溜池決壊のシナリオである。昨年モデルへのハザードマップのプロジェクトマッピングおよび、その際の議論により、驚くほど早く浸水範囲が拡大することが既にわかって

いる。しかし、山神地区では災害への備えや避難に関する困りごと、不安を挙げている住民が7地区の中で最も少なかった。これはどのように解釈すべきだろうか。

まず、災害については、当然その地域における空間的状況、地形的な条件というものが大きく関わる。まず、7地区の中で最も災害の備えへの不安が大きかった昼田地区は、宮川のほとりに位置し、過去にも多くの浸水被害が出ている地域である。反対に山神地区と同様に不安と回答した回答者が少ない小社地区は昼田地区を見下ろす河岸段丘の上に位置している。このようなことより、空間的な条件としての地形やこれまでの災害発生経緯などから山神地区では災害に付き不安を感じている住民が

少ないことが想定される。また、それに加え山神地区では自主防災組織が結成され活発に活動されていることも、この結果の一翼を担っているとも考えられる。その活動の中で、想定される災害の危険性が今後も住民に周知され、浸透することを願う。

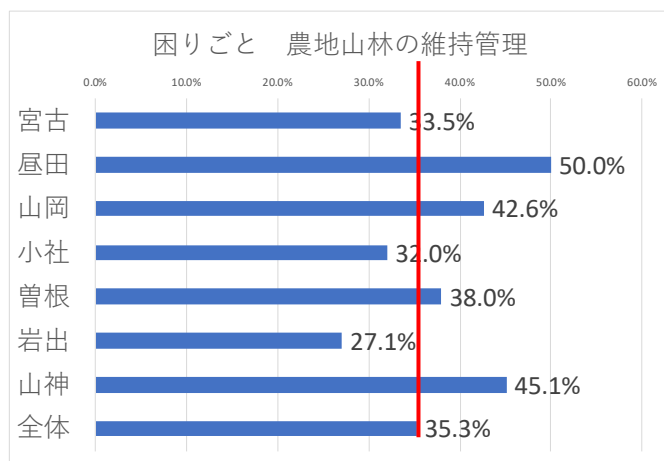


図 25 困りごと 農地山林の維持管理

困りごと検討の最後は「農地山林の維持管理」の項目である。農業者の高齢化は玉城町においても例外ではない。農地や山林の維持管理は先祖代々受け継がれたものである場合も多く、その継承や管理というのは高齢化した集落の住民にとっては大きな課題となる。

今回の調査対象の山神地区では、全体よりも 10 ポイン

ト程度、この項目を困りごととして回答した回答者が多かった。7 地区の中でも 2 番目に多い比率である。山神地区は旧来の農業集落であることから、今後農地の維持管理や継承などに課題があることが推察できる。

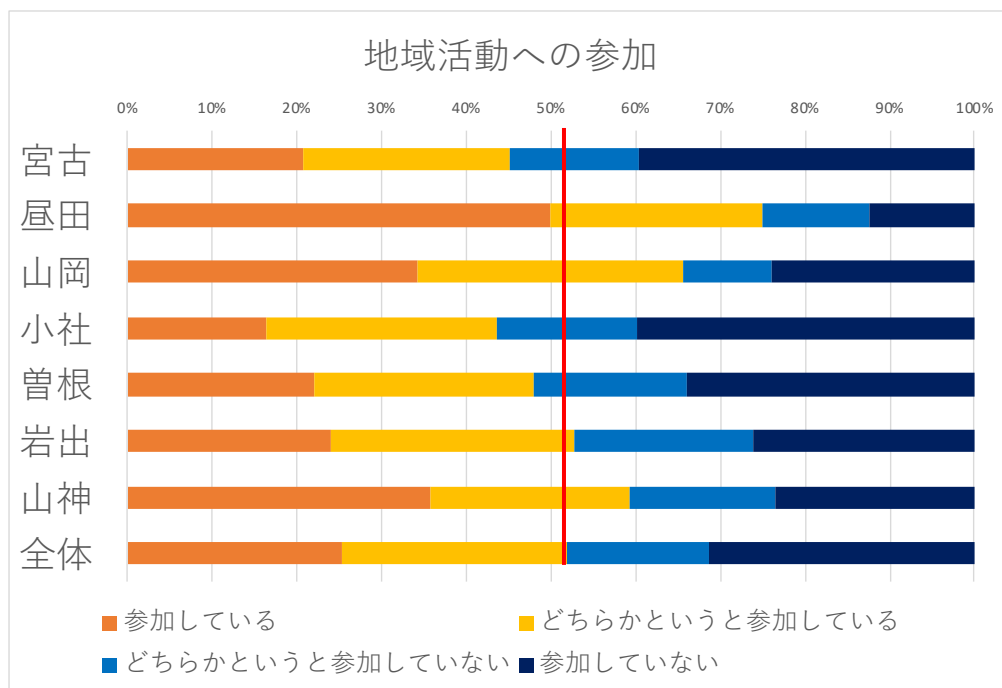


図 26 地域活動への参加

次に、調査には「(2) 地域活動ついて教えてください。※地域活動とは、地区の活

動や共同作業、まちづくり活動やNPO、ボランティア等の活動、まつり、行事、イベント等全般を指します。」と定義した上で、「問 09 あなたは地域活動に参加していますか?」という項目を設定している。この点についても各地区で比較を行った結果、山神地区は 7 地区全体よりもやや参加層¹⁸が多い傾向にあることがわかる（図 26）。前述の浸水被害が大きく想定される昼田地区での参加率が高いことも興味深い。

最後にアンケートには、次の 2 つの設問を設定している。「問 12 あなたはこの地区に今後も住み続けたいと思いますか?」と「問 13 あなたは自分の子どもにもこの地区に住んでほしいと思いますか? (子どもがいない方も「もし子どもがいたら」と考えてお答えください)」である。これまでの調査からこの 2 つの設問については

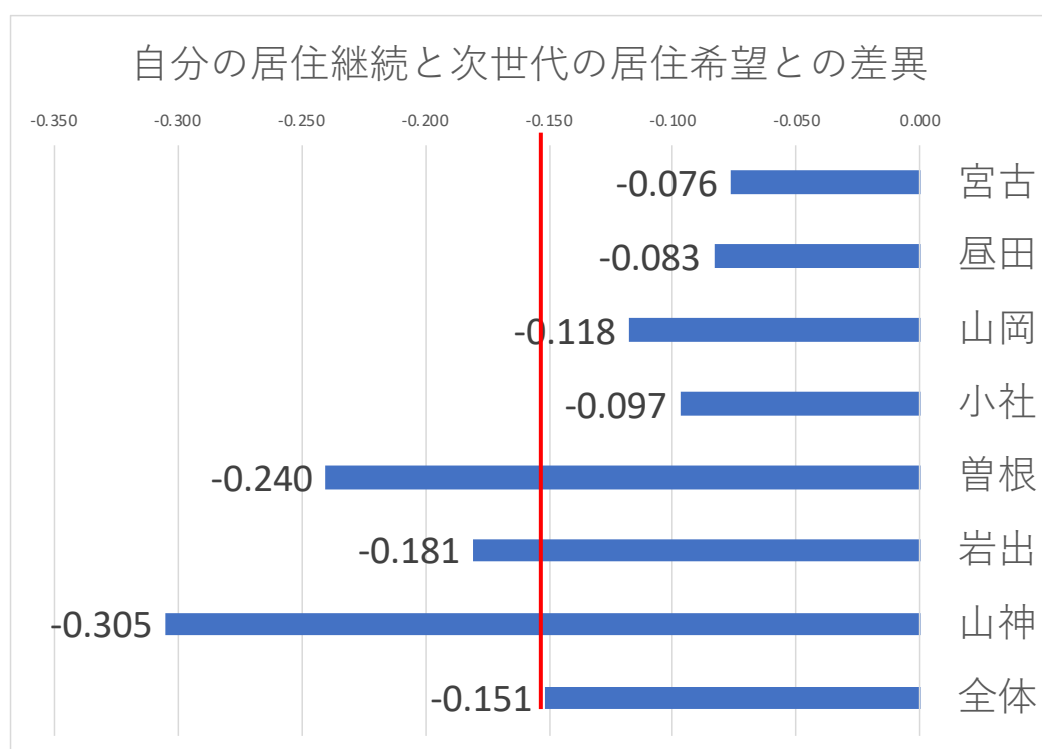


図 27 自分の居住継続と次世代の居住希望との差異

必ずといっていいほど回答者比率に差があり、自身の居住継続意思より次世代に対する居住継続希望が低い傾向にある。この差につき筆者は「地域の将来に対する不安」ではないかと捉えているが、今年度初めてこの 2 項目の差異について地域比較を行った¹⁹。図 27 に示したが、マイナスの尺度が大きいほどその差が大きい、前述の筆

¹⁸ 設問は「参加している」「どちらかというに参加している」「どちらかというに参加していない」「参加していない」の 4 観点で作成されており、前 2 者の積み上げを「参加層」としている。

¹⁹ ポイント化は「次世代の居住希望回答者比率」－「自身の継続希望回答者比率」にて行った。

者の仮定した「地域の将来に対する不安」の度合いが大きいと考えられる。

これまでの調査結果における山神地区の姿を他地区と比較してまとめると、次のようになる。今後の地域づくりの一助となれば幸いである。

- ① 困りごと・不安について
 - (ア)「健康面の不安」をあげる人が少ない
 - (イ)「災害への備え」をあげる人が少ない
 - (ウ)「農地山林の維持管理」をあげる人が多い
- ② 地域活動への参加について、他地区平均よりやや多い
- ③ 自分の今後の居住継続意思と次世代への居住希望の差が大きい。

(4) 玉城町コミュニティのあり方研究会

表4 玉城町コミュニティのあり方研究会 委員

委員 (50 音順)	所属・専門等	今年度、新規の取組として、有識者による「玉城町コミュニティのあり方研究会」を組織し、研究会を複数回開催した。これは、今後の玉城町のコミュニティのあり方を全国で活躍する地域支援者の方々や学識経験者を委員にお迎えし、玉城町の現状を分析し将来に向けての取組の方向性などを検討するものである。研究会のメンバーは表4のとおりである。研究会は5
浅見雅之氏	合同会社人まち住まい研究所代表社員・NPO 法人神戸まちづくり研究所事務局長 (まちづくり支援、災害復興支援・防災)	
池山敦	座長・皇學館大学教育開発センター准教授 (コミュニティ政策、ファシリテーション)	
石丸隆彦氏	特定非営利活動法人 M ブリッジ・まちづくり コーディネーター (地域支援・課題解決)	
伊藤純子氏	静岡県立大学助教 (保健指導、公衆衛生)	
中井一文氏	鳥羽商船高等専門学校准教授 (ICT、DX)	
名取良樹氏	玉城町地域おこし企業人・面白法人カヤック ディレクター (移住マッチングサービス等企 画運営等)	
橋本大樹氏	一般社団法人東北まちラボ代表 (災害被災コ ミュニティ支援、集落支援)	

回開催し、それぞれの開催の概要は表5の通りである。巻末に議事録を掲載しているのでご参照いただきたい。なお、研究会は感染状況に関わらず玉城町総務政策課及び座長以外の委員は全てオンライン参加で開催された。

表5 玉城町コミュニティのあり方研究会 開催概要

回	概要
1	第1回「玉城町コミュニティのあり方研究会」 1. 日時：令和3年7月5日（月）14：00-16：00 2. 場所：玉城町役場、ZOOM 3. 内容 ① 挨拶など ② 委員自己紹介 ③ 玉城町を知る：玉城町の地域コミュニティ概要について（玉城町総務政策課） ④ 事例を知る：「大規模災害被災地における地域コミュニティの課題とその支援～山元復興ステーション・東北まちラボでの取り組み」 報告 橋本大樹 ⑤ 意見交換 ⑥ 連絡事項等
2	第2回「玉城町コミュニティのあり方研究会」 1. 日時：令和3年8月16日（月）14：00-16：00 2. 場所：玉城町役場、ZOOM 3. 内容 ① 挨拶など ② 令和2年度自治区長調査報告（池山敦） ③ 事例報告「地域コミュニティでのビジネスとしての課題解決の実例～そば処 春来てっぺんの取り組み」 浅見雅之氏 ④ 意見交換「コミュニティをどう捉えるか」 ⑤ 連絡事項等 4. オブザーバー ① 三重県地域連携部地域支援課 ② 皇學館大学「伊勢志摩共生学実習 A」履修学生
3	第3回「玉城町コミュニティのあり方研究会」 1. 日時：令和3年10月28日（木）14：00-16：00 2. 場所：玉城町役場、ZOOM 3. 内容 ① 挨拶など ② 小学校区を中心としたコミュニティ形成事業（内閣府）について（玉城町） ③ 事例報告「保健師が行う地区組織活動の意義と方法」伊藤純子氏

	④ 意見交換「地縁の持つ現代的意義について」
	⑤ 連絡事項等
	4. その他
	第4回「玉城町コミュニティのあり方研究会」
	1. 日時：令和3年12月6日（月）9：30～11：30
	2. 場所：玉城町役場、ZOOM
	3. 内容
	① 挨拶など
4	② 小学校区別懇話会報告（玉城町）
	③ 事例報告「三重県内における地域支援の取り組みを通じて感じる課題」石丸隆彦氏
	④ 意見交換「地縁関係を補完する新しい仕組みについて①」
	⑤ 連絡事項等
	4. その他
	第5回「玉城町コミュニティのあり方研究会」
	1. 日時：令和4年2月8日（火）10：00～12：00
	2. 場所：玉城町役場、ZOOM
	3. 内容
5	① 挨拶など
	② 報告「ICTと地域」鳥羽商船高等専門学校 准教授中井一文氏
	③ 玉城町地域コミュニティ事業について（一社）地域問題研究所
	④ 意見交換「玉城町事業（＜正式名称で）における方針について」
	⑤ 連絡事項等
	4. その他

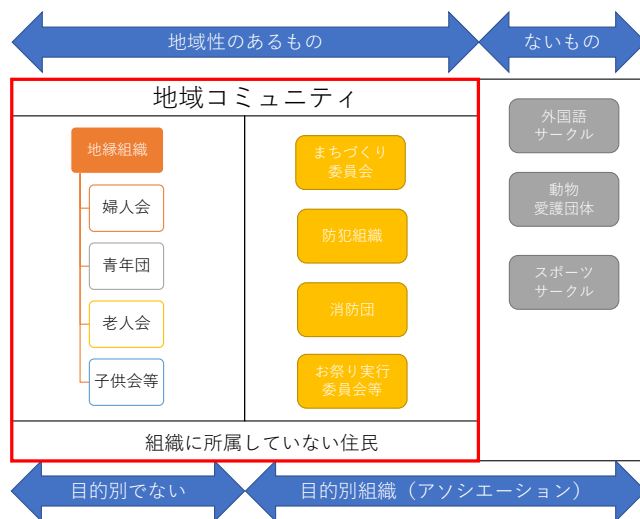


図 28 コミュニティをどうとらえるか

研究会では大きく次の3つの点について議論がかわされた。①地域コミュニティをいかなるものとして捉えるべきか。②現在の玉城町の地域コミュニティをどうみるか。③今後の玉城町地域コミュニティのあるべき姿はいかなるものか、である。

地域コミュニティをいかなるものとしてとらえるか、は図 28 に端的にまとめられる。地域空間に存

在する組織としては、大きく2つの軸により4つに分けられる。まずは、地域性のあるもの、ないものという軸、そして目的別であるか否かの軸である。地域性のあるものの中には、目的別のもの、そうでないものが存在し、前者にはいわゆる自治会などの地縁組織があり、反対に校舎にはまちづくり協議会や委員会などがある。目的別のものの中には、地域性のないものもあり、それは地域コミュニティの範疇には捉えられていない。

研究会ではこういった整理の中で、玉城町における地域コミュニティは現在「自治区（＝自治会）」が中心であることを確認した。年間を通しての議論の中、まちづくり懇話会のフィードバックなどを通して、そこに現代的な課題（役員のなり手不足やそもそもの会員にな

らない、未加入の問題等）があることを明らかになった。そして、最終的にどのようなコミュニティであるべきかについては、目的別の人のつながりと、従来の自治区のつながりを両輪と捉え、それを中心とした人と人の網目状のネットワークが重層的に形成されることにより、そこから滑り落ちる（地域の誰ともつながっていない）人がいなくなるようなコミュニティづくりが重要である、という大きな方向性について委員において確認した。

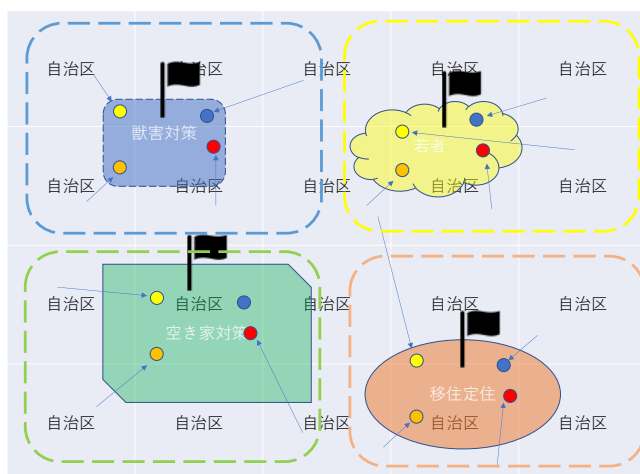


図 29 第5回研究会資料より（報告者作成）

終わりに

本稿を執筆しているのは令和4年3月8日である。我が国に新型コロナウイルス感染症の第1号感染者が報告されたのは令和2年1月14日のことであった¹。それから早2年以上が経過したことになる。折しも昨日、三重県内に発出されていた「蔓延防止等重点措置」が解除された。筆者の勤務校でも次年度への準備が着々と進む時期ではあるが、次年度において講義が全て対面で行えるかどうかはまだ定かではない。筆者の担当講義は令和3年度においてはいくつかの講義においてオンラインでの開講となった。

世界はこの2年で大きく形を変えた。形を変えた世界は、もとの箱には戻せない。マスクをしないことに対して人は眉をひそめるし、多人数での宴席は白眼視される。人々は分断を深め、他者に対して不寛容になったのではないだろうか。

毎年3月になると、東日本大震災が蘇る。当時、未曾有の大災害から1ヶ月程度経ち、桜が咲く時期に「花見をするなどけしからん」という風潮があったことを思い出す。東日本で困難に直面している人がいるのに、なんという不心得な、という空気があった。これは、今回の「マスク警察」と揶揄された一部の動きにも重なる。そして、その先には集団心理として戦前戦中の「欲しがりません、勝つまでは」「非国民」といった同調圧力や、さらに関東大震災での虐殺の悲劇なども想起される。

「ただしく物事を見る」という姿勢が問われているのではないか。それは、科学的知識や予防措置の実践、人との関係、社会のあるべき姿などさまざまなところに妥当するように思える。コップは上から見れば丸いが、正面から見れば四角い。両面から見ないとコップの正しい形はわからない。「盲群、象を評す²」という例え話があるが、われわれは物事を一面からのみ見てはいないだろうか。正しく今、地域に起きていることを見るためにはどうすればよいのか。考え続ける必要がある。

最後に、本研究事業にご助力いただいた地域の皆さん、関係協力機関の皆さん、本学事務職員及びアルバイト学生諸君、そして玉城町役場職員 みなさんに厚く御礼を申し上げる。

令和4年3月8日
皇學館大学教育開発センター准教授
池山敦

¹ https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_08906.html

² 「多くの盲人が象をなでてみて、その手にふれた部分だけで象のことをうんぬんするように、凡人は大人物や大事業の一部分しかつかめず、大局からの見方はできないということをたとえていった。「北本涅槃経」巻三二、「菩薩処胎経」巻三などに見えるたとえ。」（精選版日本国語大辞典より）

令和3年度玉城町明るい未来づくりに関する調査研究業務 資料編

(1) ワークショップ等報告

地域でのワークショップ

No.	タイトル	実施場所	実施年月日	備考
1	地形模型ワークショップ 「あつまれ野篠っ子！じぶんの“まち”をつくろう」	野篠公民館	令和3年10月2日	30名参加
2	アプリ体験とまちあるきワークショップ「あつまれ、野篠っ子！じぶんの“まち”をあるこう！」	野篠公民館	令和3年11月21日	27名参加
総参加者数				57名

コミュニティのあり方研究会

No.	タイトル	実施場所	実施年月日	備考
1	第1回研究会	オンライン	令和3年7月5日 14:00～16:00	
2	第2回研究会	オンライン	令和3年8月16日 14:00～16:00	
3	第3回研究会	オンライン	令和3年10月28日 14:00～16:00	
4	第4回研究会	オンライン	令和3年12月6日 9:30～11:30	
5	第5回研究会	オンライン	令和4年2月8日 10:00～12:00	

地域別懇話会へのアドバイザー派遣

No.	タイトル	実施場所	実施年月日	備考
1	下外城田地区地域別懇話会	下外城田小学校	令和3年11月9日	石丸隆彦
2	田丸地区地域別懇話会	田丸小学校	令和3年11月11日	石丸隆彦
3	外城田地区地域別懇話会	外城田小学校	令和3年11月15日	石丸隆彦
4	有田地区地域別懇話会	有田小学校	令和3年11月18日	石丸隆彦

(2) 調査等報告（令和3年1月現在）

コードブック	住民対象調査度数分布（単純集計）
--------	------------------

令和3年度 TMKミライデザインプロジェクト 実施報告書 vol.1

タイトル	地形模型ワークショップ 「あつまれ野篠っ子！じぶんの“まち”をつくろう」 ※新規地区（1年目）
開催日時	令和3年10月2日（土）8：30～11：30
開催場所	野篠公民館
参加者	住民30名（大人16名、子ども14名）
スタッフ	皇學館大学教育開発センター池山敦准教授、Mブリッジ2名
当日のスケジュール	
07：30 スタッフ集合（模型設置、受付設置、模型上に地域の方の豆知識をプロット）	
08：30 開始～予約に従い来場（15分1単位あたり、2組程度）	
11：30 終了	
概要	
今回のワークショップは、地域の現状を模型等で可視化することで、住民が地域を見直し、地域課題を「自分ごと」に捉えるきっかけづくりを目的に実施した。 当日は、地域の模型を野篠公民館に展示し、それを囲みながら新旧の地域住民らが交流をした。なお感染症対策への観点から一度に集まるのではなく時間内に予約制で来場することとし、参加者の滞留時間をできるだけ減らしてソーシャルディスタンスを取りながらワークショップを実施した。 当日来場した地域住民らにより「常夜灯」「山神」「彼岸花」などの「地域の情報」を記入したボードが、模型上に数多く配置された。また来場した親子らは、あらかじめ配布したチラシの裏面のお絵描き欄に子ども自身が自宅や家族の絵をかいて持参し、模型上の自分の家がある位置を探して絵を配置した。また全員が一同に集まって交流するのが難しかったことから、来場者1人ひとりの写真をポラロイドカメラで撮影し、会場に掲示して誰が来場したかわかるように工夫した。また会場内では地区の昔の航空写真などをスクリーンに投影。昔からの地区の変化を眺めながら新旧の住民同士の対話がはずんでいた。 参加者らは「こんな機会がなかったら若い世代と交流することがなかった。話ができてよかった」「地域の知らなかったことを知れて楽しかった」「コロナ禍で集う機会が減っている中で、0歳から高齢者までが一緒に集まれたのは、なかなかない貴重な良い機会だった」などの感想がきかれた。	
実施風景	
 交流のようす  地域模型  参加者の写真ボード	

令和3年度 TMKミライデザインプロジェクト 実施報告書 vol.2

タイトル	あつまれ、野篠っ子！じぶんの“まち”をあるこう！ ※新規地区（1年目）
開催日時	令和3年11月21日（日）9：00～12：00
開催場所	野篠公民館
参加者	住民27名（大人14名、子ども13名）
スタッフ	皇學館大学教育開発センター池山敦准教授、鳥羽商船高等専門学校中井一文准教授・学生4名、Mブリッジ2名、玉城町役場総務政策課2名
当日のスケジュール	
09：00 事業説明	
09：05 鳥羽商船学生作成のWEBアプリ「マチシルクエスト」体験会	
09：40 まちあるき	
11：30 ふり返り／模型へのプロジェクションマッピング	
12：00 終了	
概要	
今回のワークショップは、地域の現状を可視化することで、住民が地域を見直し、地域課題を「自分ごと」に捉えるきっかけづくりを目的に実施した。 冒頭は、玉城町とファシリテーターの皇學館大学・池山敦准教授が事業の説明を行った。その後、鳥羽商船の学生らがWEBアプリ「マチシルクエスト」を紹介し、体験会を実施した。参加者は、子どもを中心に3～4人に1人ずつタブレット端末を持ち、ゲームを通じて楽しみながら地域の現状や課題などに触れていた。 その後、参加者の親子と地区の人が外に出てまちあるきワークショップを実施した。このまちあるきは、新旧の住民が実際に一緒に歩くことで野篠地区の魅力を見直し、愛着を深めるきっかけづくりを目的に実施した。熊野街道沿いにある接待地蔵や常夜燈、山の神などをめぐり、各ポイントで地区の人がその場所にまつわる歴史などを紹介した。各ポイントをめぐる途中にも「カブトムシが採れる場所」や「昔はこのあたりに古墳があった」など地域情報を歩きながら紹介し、子どもたちは初めて知ることを楽しそうに聞いていた。またまちあるき中は子ども達にカメラを渡し、子どもの視点から見た「野篠の好きなところ」を撮影してもらった。その写真は振り返りでプロジェクターにて投影した。またスタッフがまちあるき中に来場者の写真をポラロイドカメラで撮影し、撮影した写真は、参加者・野篠地区それぞれに記念として渡した。 公民館に戻ってからは、地域の立体地図（地形模型）に地区の航空写真をプロジェクターで投影し、地域の地理的な特徴などを立体的にわかりやすく説明した。また最後には子どもたちが撮影した写真などを見ながら、ワークショップのふり返りを行った。ゲームやまちあるきなどを通して、新旧の住民らが一緒に地域の過去の歴史や現状を知ること、地域の未来について考える良い機会となっていた。参加した子どもからは「初めて知ることがたくさんあった。みんなで一緒に歩けたのが楽しかった」、地区の人からは「子どもたちに地域のことを知ってもらえてよかった。このような交流の機会をもっと作っていきたい」などの感想が聞かれた。	

実施風景

〈WEB アプリ体験〉



アプリの説明



アプリの体験



アプリの体験

〈まちあるき〉



地区の人からの説明



地区内を一緒に歩く



地域の魅力をめぐる

〈その他〉



玉城町からのあいさつ



プロジェクションマッピング



集合写真

第1回玉城町コミュニティのあり方研究会 議事録

開催日時：令和3年7月5日（月）14:00～16:00

開催方法：WEB 会議システム「Zoom」を使ったオンライン開催

参加：池山敦氏、石丸隆彦氏、伊藤純子氏、中井一文氏、名取良樹氏、橋本大樹氏（50音順）、欠席：浅見雅之氏

① 挨拶など

- 本日の流れの確認
- 玉城町総務政策課地域づくり推進室杉森主事から挨拶

② 委員自己紹介

- 伊藤純子氏（静岡県立大学看護学部助教）
 - ・ 専門は公衆衛生看護学。教員になって15年。静岡県立大学は5月末から。
 - ・ 健康は病院だけでつくられるわけではない。公衆衛生看護学は、病院の外（入る前・出た後）でどう生活するか、を始点にした学問。保健師は、社会の要請とともに変化してきた特殊な職業。戦後は感染症、高度成長期は生活習慣病、昨今はまた感染症が再来…。また子供虐待、孤立死など社会の健康問題に関する仕事を県の保健所や市町の保健センターなどで取り組んでいる。
 - ・ 健康はどうやって生まれるか。少し前までは自己責任の時代だったが、最近は社会的な要因に左右されることが研究で分かっている。「つながりがいい」ということが大きな健康リスクになる。地域の健康問題を解決するには、人と人とのつながり・支え合い、自助共助公助を積極的に活用することが必要。保健師の仕事も、地域の中での居場所やつながりづくりの支援が中心的な流れになっている。
 - ・ 地域の健康課題の解決に向けて、まずは問題が何かをあきらかにするために地域診断をしている。今後、そういった知見も紹介できれば。
- 石丸隆彦氏（特定非営利活動法人 M ブリッジ・まちづくりコーディネーター）
 - ・ 松阪市にある中間支援の特定非営利活動法人。玉城町出身。キャリアコンサルタント。県事業などを受託し、地域づくり、オンラインの企業説明会等に取り組み、大学生や若者の就職支援もしてきた。
 - ・ 昨年度は松阪市の住民協議会で、地域の現状を自分ごとに捉えてもらうための全住民アンケートを実施。住む人の生の声を聴いた。
 - ・ 昨年度から三重県事業で20代・30代のコミュニティづくりに取り組む。成果として、林業振興、木育の一環として移動式のサウナづくりに取り組む。7/17に「サウナ×地域づくり」のイベントを実施。
- 中井一文氏（鳥羽商船高等専門学校 情報機会システム工学科 准教授）
 - ・ 志摩市出身・在住。専門はIoTやEWBシステムの構築。
 - ・ これまで地元密着のプロジェクトを手がけてきた。買い物支援、地域課題のゲーム化、観光案内アプリ、小中学校でのプログラミング出前授業、小型船舶向けアプリ

など、行政・大学・企業などとさまざまなプロジェクトに取り組む。「地域の便利屋さん」のようなイメージで ICT 活用をしている。

- 橋本大樹氏（一般社団法人東北まちラボ代表）

- ・ 宮城県山元町在住。生まれ・育ちは神戸市。宮城県にきて 9 年目。
- ・ 神戸まちづくり研究所（事務局長／浅見雅之氏）に所属し、宮城県とはゆかりがなかったが浅見氏の声かけで宮城へ。
- ・ 兵庫県にいたるときから地域づくり、限界集落の自治会の運営支援などをしてきた。現在も（兵庫県の）地域運営組織のアドバイザーを担う。

- 名取良樹氏（面白法人カヤックディレクター）

- ・ 5 月から玉城町の地域活性化起業人に。面白法人カヤックで 4 年勤務し、建築家のマッチングサービス、移住定住・関係人口マッチングサービスをベースに拠点開発や地域プロモーションに取り組んできた。
- ・ 面白法人カヤックについて。上場 6 年目のインターネット企業。広告コンテンツ制作、ゲーム制作、地域系事業の 3 本の柱で事業を行う。本社は鎌倉。地域に根ざす企業としてローカライズ経営をしている。スカウト型マッチングサービス「SMOUT」、コミュニティ通貨（まちのコイン）などのサービスを開発。プラットフォームとして導入した地域に対してプロモーションや拠点開発もサポートする。
- ・ 鎌倉は中小企業が多く、1 社でもちきれないものを共同保有するサービス「まちのシリーズ」も展開している。例えば、保育所、社員食堂、採用など。これもコミュニティを形成するしかけのひとつである。
- ・ 玉城町に関わるきっかけは、紀伊半島の移住プロモーション。元玉城町総務政策課の里中氏が面白法人カヤックを訪問したことがスタート。
- ・ 震災時、東北に拠点を置いたが、拠点を置く意味をなかなか見出せないなかで撤退した。その後、地域に根づいたサービスを展開したいと「SMOUT」に着手した。

- 池山敦氏（座長・皇學館大学教育開発センター 准教授）

- ・ 「コミュニティとは」について再確認。現在では、何かの目的や旗があってそのまわりに集まっている人を指すことが多い。
- ・ コミュニティの定義とは。古典的な定義では、村や町などの共同生活の領域を指す。無目的で一次的なつながり（例：地縁、家族など）。自治会なども当てはまる。都市化すると、目的を持って集まった組織（例：趣味のサークルなど）に変化するといわれてきた。自治会では消防団など目的がある組織もあるが、本事業では、コミュニティは前者（無目的で一次的なつながりの方）を指すと考えている。

③ 「玉城町におけるコミュニティの実情」（玉城町総務政策課地域づくり推進室）

- 玉城町の概要

- ・ 三重県中部に位置するコンパクトな街。人口は約 15,400 人、約 5,800 世帯。伊勢平野の南部に位置し、大半が農地として利用されている。伊勢神宮へ向かう参宮客の交通の要所、熊野街道の始点があり、町内に複数の街道がある。田丸城の城下町として栄えた歴史もある。昭和の合併で 4 つの町が合併して今の形になった。

- ・ 4 学区（田丸地区、外城田地区、有田地区、下外城田地区）それぞれに小学校があり、中学校は 1 つ。

- **自治区について**

- ・ 玉城町は自治会を「自治区」と呼び、69 地区ある。
（学区別自治区数）
 - 田丸地区
29 地区／2,325 世帯／玉城町の中心地区。用途地域の選定。主要公共施設がある。
 - 外城田地区
13 地区／1,588 世帯／パナソニック、美和ロック、京セラなどの企業が立地。郊外型の住宅街と既成集落が点在する。
 - 有田地区
16 地区／1,177 世帯／一部用途地域の選定。住宅開発地と古くからの既成集落が混在。幹線道路が通り、スーパーなどの商業施設が混在する。
 - 下外城田地区
11 地区／758 世帯／主に農地と既成集落で構成。4 学区の中で一番小さく、高齢化や少子化が目立つ。

- **地域のコミュニティの現状とこれから**

- ・ 現在考えられる地域のコミュニティをとりまく 3 つの課題は下記の通り。
 1. 自治区未加入世帯の増加
H20 年 3 月末 19%⇒R2 年 3 月末 25%
背景には、近隣市町からの転入による人口移動など。
加入・受入側双方の課題があり、新規移住者を受け入れない区もある。
 2. コミュニティを構成する担い手不足
転入者のコミュニティ活動の参加が少なく、活動メンバーの固定化、人員の高齢化が進む。例えば、草刈りなどの寄り合い活動ができなくなり、町（行政）に担ってほしいという要望も出てきている。
 3. 持続可能なコミュニティ活動を組織・実行する仕組み不足、意識不足
地域ごとに個別で地域活動を展開しているが、それぞれの地域の横断的な対応や連携を行う仕組みが不足している。
- ・ 町として令和 3 年度に各小学校区におけるコミュニティ形成へ向けた基本方針を策定し、令和 5 年度にかけて各小学校区での事業化・定着を目指したい。地域では旧村単位の意識が根強く残っているため、学区におけるコミュニティ形成ができればいいのでは。

④ 「大規模災害被災地における地域コミュニティの課題とその支援～山元復興ステーション・東北まちラボでの取り組み」（橋本大樹氏）

- **山元町の被害状況**

- ・ 宮城県の南。福島県との県境地域。
- ・ 現在は約 4,700 世帯、約 12,000 人。（震災以降 4,700 人減）
- ・ 震災時の被害状況は、死者 635 人。街のほぼ 4 割に津波被害を受ける。

- ・ 町内には8か所の仮設住宅（1,000戸くらい）があった。

● 山元町復興まちづくりの実践

山元町のコンパクトシティ計画

- ・ 分散した集落を3つの新市街地に集約。移転先を3つに絞った。つばめの杜地区（自治会を新たに設立）、桜塚地区（初既存の地区に入る予定だったが、既存地区からの反対があり新たに自治会設立）、町東地区（既存の自治会に加入）。
 - つばめの杜地区（540世帯）
山元町のなかでは大きい集団移転地。2の自治会（西区・東区）を新たに設立。
 - 桜塚地区（72世帯）
福祉エリアのイメージ。老人福祉施設が2つある。ほとんどが公営住宅。高齢化率50%。
 - 新坂元地区（111世帯）
かさ上げして宅地を造成。道の駅や山元町の支所がある。

新市街地のコミュニティ形成

- ・ 東北まちラボは、復興まちづくり協議会の運営支援を行う。具体的には、まち協や自治会の運営の支援。地域の組織と行政の間に立って、利害関係のない立場から地域づくりのファシリテートを行ってきた。
- ・ 3つのやり方でコミュニティづくりに取り組んできた。
 - ①入居してからのコミュニティづくり（つばめの杜西区）
 - ②入居者と予定者のコミュニティづくり（つばめの杜東区）
 - ③入居前からのコミュニティづくり（桜塚地区）
- ・ 「つばめの杜西区」…入居してからのコミュニティづくり
 - イベントを通じたコミュニティづくり
例）ハロウィン…独居老人の家を子どもたちがまわる
つばめの巣（お酒アリのサロン） 普段イベントに出ない人もでてくる。
⇒最初はとにかく交流会をしてイベントを開催した。しかし次第に同じ人がくるなど効果が薄れてきたため、質を上げていく方向に転換。
 - 訪問活動を通じたコミュニティづくり
孤独死などを防ぐために地域の中で見守り隊をつくり戸別訪問した。
75歳以上高齢者、70歳以上単身者のお宅に月1回訪問。
 - 話し合い、共有を通じたコミュニティづくり
従来のように自治会長等役員が決めて定期総会で事後報告するかたちをやめ、定期的に集まって会議を実施。参加者は40～80代。男女比はほぼ同じ。地域住民に知ってもらいたいと、参加者が自主的に広報紙をつくり、配布するようになった（不定期で2か月に1回程度）。役員の中でライングループもできた。
- ・ 「桜塚地区」…入居前からのコミュニティづくり
 - 自治会をつくる前に世話人会をつくり、入居前からたくさん会合を行い、地域の名前も住民らが決定した。
 - アンケートによると、入居後の地域の人同士の関係性は「挨拶程度」。かならず

しも深い関係性にはなっていない。住む前からのコミュニティづくりについては、半数以上が効果があったと答えた。良かった点は「班編成などを決められた」「お隣さんがわかった」など。

取り残された浜通り自治会のコミュニティ再生

- ・ 浜通り地区は、震災前 300 世帯近くあったが 30 世帯になるという急激な人口減少が起こった。
- ・ 地域運営の支援をするなかで、住民自身も行政と話し合いをしたり、要望するタイミングや内容によっては要望が通ることがわかった。(例：ワークショップをすることで集会場が再建できた)
- ・ 人口が増えないのでこの先どうするかという課題はある。
- ・ 住民自身が地域診断し、何かしらの手伝いが必要であることを理解している。

➤ まとめ

- ・ 公共性が高いほど地域の人でも自分ごとではなく関心が低くなる。逆に公共性が低くなるほど地域の人々の関心度は高くなる(例：自分の住宅がどうなるか など)。
- ・ 地域づくりでは、行政主導で決めることも多いが、決め方を皆で決めて合意しておくことも有効ではないか。
- ・ 地域のコミュニティをつくるとき、自治組織運営支援～自治組織運営支援補助までは伴走することが有効だった。
- ・ 課題は、地域と行政の役割が明確になっていないこと、田舎の自治会は義務化しがちなものでそれをどうゆるめるか、組織のスリム化、独居高齢者がほとんどで若い人が住めない仕組みになっている(収入が高い人ほど家賃が高い)そういった仕組みをどう変えていくか、など。

⑤ 議論

- 山元町はコンパクトシティとして 3 か所に集約された話題提供があったが、新しい市街地は、元の地域がそのまま移転するのではなく、住民がシャッフルされているのが難しい点であった。そのため事前にコミュニティをつくるのが有効だった。
- コミュニティの形成にとりくむとき、まずは地域のキーパーソンの選出が難しいのでは。キーパーソンをどのように見つけ、選びだされていったのか。
 - 世話人を抽出する前に全世帯対象の説明会を実施した。100 世帯近くに呼びかけても来る人は 20 人程度。そこで発言したり、役場に話をしに来たりした方は 5 人程度。そういう方をつかまえた。「ちょっと手伝って」と言うことは行政にはなかなかできないので中間支援組織が担う。
 - 地域づくりの説明会などは、事後のかかわりが重要。その 20 人、5 人との人と丁寧に関係性を築くことが大きな環境づくりにつながったのでは。準備会の主催実質は行政や中間支援組織だが「世話人会」(地域の有志)という体にするすることで、地域の主体性を引き出すしかけとした。
- 地縁・自治会などのコミュニティは無目的で自然発生的に生まれるものという話題があった。山元町はコミュニティを 0⇒1 でつくった事例。そこには無目的さがあったのか、

ある程度必要性を持ってつくったのか。

- コミュニティをつくる過程では色んな考え方があった。「自然発生的に仲良くなり、自治会も生まれるかもしれない」という考えもあれば、「コミュニティを束ねる組織をつくらないとコミュニティはできないのでは」という考えもあった。実際、コミュニティをどうやってつくるか、を何人かから聞かれたこともある。今回の事例において、コミュニティを構成するのは、生まれた時から当たり前にコミュニティがあった人たち(引っ越しして新たなつながりをつくった経験などがない方)だった。そのなかで一から全てのコミュニティをつくる際に、自然発生的にできるかというとなかなかできない。仮設住宅でもお隣との関係性がなかなかできないし、高齢者になるほどコミュニケーション能力もおちる。組織のまとめ役の必要性を感じながらやってきた。
- 現状は山元町のどの地域も「目的をもったコミュニティ形成」になっているように見える。地域運営組織をつくるときに、無目的を前提としてその枠組みを提供したのか、目的を明確にしたうえで枠組みを提供したのか、でプロセスが全然違うのではないか。目的のないコミュニティだと、成立しにくいのではないか。
- 社会学的にはコミュニティは、無目的な集団が都市化すると目的を持った集団に移行していくといわれている。しかしなぜ地縁のものが残っていくのか、という視点もある。
- 何かの課題や問題が見えて、初めて目的が明確になっていく。無目的の状態でも、目的が見つかることもあるし、ないまま進むこともあるかもしれない。例えば、つばめの杜街区公園の公園管理会は「公園を誰が管理するのか」という課題から、自分たちで管理しようと管理運営する組織をつくった。自治会は色んな課題や目的がある集団で、無目的かもしれないが、その中で目的を絞って取り組む組織も生まれている。
- 一般的な地域で考えると、昔からの無目的のコミュニティの維持が難しくなっている。目的ありの集団と無目的の集団の橋渡し、溝を埋めるにはどうすればいいのか。昔は、農地を共有資源として管理してきたように、現在の「無目的で作られた自治会」も目的を設定しなくてもみんなに共有することができていた。しかし現代では目的を明確にしない集団がもう存在できないのでは。枠組み自体を見直す必要があるのではないか。

⑥ 諸連絡

- 情報共有と資料のストックのために SLACK を活用する
- 次回日程 8月16日(月) 14:00~16:00 (Zoomにて)

第2回玉城町コミュニティのあり方研究会 議事録

開催日時：令和3年8月16日（月）14:00～16:00

開催方法：WEB会議システム「Zoom」を使ったオンライン開催

参加：浅見雅之氏、池山敦氏、石丸隆彦氏、伊藤純子氏、中井一文氏、名取良樹氏、橋本大樹氏（50音順）

オブザーバー：三重県地域連携部地域支援課、皇學館大学伊勢志摩共生学実習の履修学生

① 挨拶など

- 本日の流れの確認
- 各委員の紹介

② 玉城町自治区長調査報告（池山敦氏より）

- 調査の概要
 - ・ 実施期間は令和2年10～11月。玉城町の68自治区を対象に実施。郵送回収。最終的な回収率92.8%（配布数67、回収数64）。
 - ・ 2009年「町内会・自治会など近隣住民組織に関する全国調査」（辻中豊）と一部比較（質問項目を揃える等）して報告する。
- 調査報告
 - ・ 自治区の数について。玉城町は4小学校区に分かれている。回収数は、外城田地区13、田丸地区23、有田地区16、下外城田地区12。田丸地区は旧城下で区割りが細かい傾向がある。それ以外の3地区は農村地域である。
 - ・ 加入世帯について。10世帯から250世帯までバリエーションがあるのは一つのポイントである。ヒストグラムで表すと、最も多いのは「50世帯まで」の自治区。平均値は64世帯、中央値は55世帯。
 - ・ 世帯数が多い区は、新田町（田丸地区内で新興住宅として開発）や玉城苑（常田地区で昭和以降にニュータウン的に開発）など。他には原地区、下田辺など“旧来から人が住むエリア”と“新興住宅地”がくっついたエリアも世帯数が多い。小学校区別の平均世帯数でみると外城田地区が多い。田丸は区割りが細かいためかそれほど多くない。
 - ・ 加入率は90.57%（注：町が把握する数字とは異なる）。低い場合は50%以下。加入率80%以下と答えた区が5自治区あった。
 - ・ 区長・役員・役員会について。軒数と役員数の関連性は見られなかった。「被雇用者」（現役で働く世代が役員を担うケース）が最も多く、次いで「退職者・年金受給者等」。
 - ・ 区長の選出方法は「総会の選挙（47.1%）」「持ち回り（47.1%）」が多い。
 - ・ 役員の選出方法は「持ち回り（60.8%）」が最多。役割としては、副区長、会計、評議員など。
 - ・ 役員会の回数は、コロナ禍中の調査ということもあり少ない（2～3回）。しかし30回というところもあった。
 - ・ 自治区の活動の中で大切な役割の1位は「地域における生活環境の維持管理」。例えば、清掃活動、ごみ集積所の掃除など。次は「地域の問題への自主的な取り組み」「市町村への要望や働きかけ」の順に多かった。全国調査と比較すると「親睦を深めること」が最も多いが、玉城町はそうではなく自主的な取り組みへの意識が高いことが分かった。
 - ・ 自治区の収入について。年間の総収入の平均値は132万円、中央値は87万円。

最大値は 678 万円、最小値は 10 万円。主な収入源は自治会費（50.5%）。残りは市町村からの補助、業務委託費など。

- ・ 支出では「その他」が最も多い。例えば、慶弔費・親睦会費・各組への分担金・水道光熱費・防犯灯の修理・総会使用量・人件費・寄付金・役員報酬など。次に多い順に公共施設（集会所、公民館等）の維持管理費、地域の清掃や美化、祭り、防災活動、文化活動と続く。
- ・ 地域における住民同士の付き合いは「5 年前と比べてあまり変わらない」と答えた区長が最も多かった。
- ・ 地区の環境についての自己認識を「生活の利便性」「交通の利便性」「生活の安全性」「自然環境の豊かさ」「伝統文化や地域の個性」の 5 つの視点から評価してもらった。下外城田地区は「生活の安全性」は 4 地区の中で最も高いが、「生活の利便性」は下外城田が最も低く、有田地区（県道、商業施設がある地域）が最も高い。「交通の利便性」では JR 駅のある田丸地区が最も高く、外城田地区が最も低い。「伝統文化」は有田地区が最も高い。このように順位が入れ替わるのが 1 つのポイント。
- ・ 自治会の活動内容は、上位から「地域の清掃」「生活道路や街灯の管理」「集会所・児童館の管理」「慶弔の世話」「ゴミ処理やごみ収集（集積所）」「消防」。
- ・ 大切だと捉えられている活動は、上位から「地域の清掃や美化」「防災（自然災害）」「ごみ収集、収集」「祭りの実施」など。玉城町では平成 29 年に台風による水害があり、防災に対する意識が高まっている。
- ・ 業務の円滑さについて。これは円滑でないことをあぶり出すことが狙いの問いである。「財源確保」「加入世帯への活動参加」「世代間の交流」「旧来の住民と新来の住民との交流」に難しさを感じていることがわかった。
- ・ 区長について。男性 55 名、女性 2 名。平均年齢 61.6 歳。男性区長がスタンダードで女性区長は 3.5% だった。定年延長などから、60 代の方も仕事に行っているので地域の役員を頼もうとしても忙しくて難しいという声もあった。

③ 事例報告「地域コミュニティでのビジネスとしての課題解決の実例～そば処春来てっぺんの取り組み」（浅見雅之氏より）

● 自己紹介

一級建築士。1995 年に阪神大震災で被災。2001 年から兵庫県のまちづくりアドバイザーなどを務める。東日本大震災の復興まちづくり支援として 2011 年から 6 年間、気仙沼に毎月通う。ホワイトボードレコーディングが得意。

● そば処春来てっぺんについて

- ・ 平成 11 年にできた村で運営しているそば屋。
- ・ 集落の全世帯が出資者（各人 10～30 万）となり、出資金約 500 万を元手に国の補助金を使って設立。
- ・ きっかけは、昭和 50 年に国道 9 号に春来トンネルが建設され、人の流れが変化したこと。村が衰退することへの危機感から村づくり委員会を設置。そば屋を運営することに。
- ・ 基本的に村の中の人だけで、23 年間赤字なしで運営してきた。年間のお客は約 2000 人、年商 3000 万円。従業員は約 20 人（すべてパート）、最低賃金確保。役員報酬も出ている（組合長で月 9～12 万円程度）。役員報酬が出ている村おこし事業は兵庫県内では他に例がなく、優秀な村おこし事業といえる。
- ・ 村の人たちは高齢化し、若い人は地区の外へ出ていく。社会保険・雇用保険未完備（労災だけはあつた）の労働環境なので、村の若者の就職先にはならず、他

地域から雇うことも難しそう。「組織を立ち上げ直して新しい経営の方法を見出したい」という地域の意向で、浅見氏がアドバイスに入る。

- ・ 今後人口減が明らかな社会で地域の困りごとを解決できる組織（法人）にしてはどうかと浅見氏が提案した。（例：高齢者の地域の足、営農組合の法人化、自治会活動も会社でやる？など）

- **法人化して現在にいたるまで**

- ・ 法人化することが決まってから、3 年間試行錯誤して株式会社を立ち上げた。当初は NPO を想定していたが、NPO は法律上農地を持てなかった。最終的には地域からの希望もあって株式会社になった。

- ・ 現在に至るまでの流れ

- **第 0 段階（最初の状態）**

そば生産組合は現金 2000 万円があった。株式会社にしたいが、出資金によって意見の重さがかわると自治会向きではない。またもし株にして分けたら、売られてしまう心配もあり、売れない仕組みを模索した。

- **第 1 段階 春來区の法人化**

春來区自治会（任意団体）が法人化して「春來区自治会法人（以下、自治会法人）」を設立。（任意団体のままでは株を保有することができないので）

- **第 2 段階 組合の資金の移動（寄付）**

そば生産組合が自治会法人に約 2000 万円を寄付。自治会法人は非営利団体なので、寄付に関しては税金がかからない。2000 万円まるまる寄付できた。

- **第 3 段階 新会社の設立（出資）**

自治会法人が 990 万円を出資して「てっぺん株式会社」を設立。資本金 1000 万以上の場合、初年度から消費税を払う必要があったため、消費税を 2 年間免除されるために自治会法人に 1010 万円を残した。

- **第 4 段階 棚卸試算建物等の売買**

990 万円の資金を使って、そば生産組合から棚卸資産と建物を 800 万円で買い取る。そば生産組合には財産がなくなるが現金（800 万円）が残る。

- **第 5 段階 組合員に出資金の返還**

そば生産組合にできた現金を使って春來区民にお金（600 万円）を返す。23 年経ったので 20%増やして、出資金 500 万円を 600 万円にして返金。

- **第 6 段階 経営の移行**

3/31 から 4/1 に全ての手続きを完了。経営母体が変わっただけなので、従業員の環境は変わらずに無店休で経営移行が可能。

- **第 7 段階 組合の精算・剰余金寄付**

そば生産組合に現金が残っていたが、約 150 万円は納税し、剰余金約 50 万円は自治会法人に寄付。

- **第 8 段階 株式会社による経営**

そば生産組合は解散。春來区は株式会社の経営方針、意思決定、人事権を完全掌握。取締役 2 人は、そば生産組合の組合長と副組合長がそのまま残る。法人化の世話をした浅見氏が責任をとるかたちで代表取締役に就任。2～3 年かけて誰が社長をやってもまわる組織をつくろうとしている。

- ・ 現在、近隣の町から 30 代女性が 2 人入社し、正社員として雇用。旧来のスタッフはパートとして働いている。
- ・ 初年度は帳簿の電子化、クラウド型のレジの導入、保健所の営業許可の取り直し、社会保険・労働保険の整備などを行ってきた。
- ・ 今後の経営の優先順位は、まずは地域の人が機嫌よくニコニコ働ける環境。そ

れを継続するためにお客さんにご満足いただく、という考え方でしている。23年経つとそば屋に関わりのない村の人は「自分に関係ない」という感があるが、自治会の持ち物であることを意識づけして働きかけていきたい。

④ 意見交換

- 春来地区に類似する地域が玉城町にも 2 地域程度ある。農村部で地域のつながりが濃い。しかし、そば屋を運営するきっかけのようなものが想像できない。自治会離れが進んでいるので、住民の個々に接続していくことが難しい。春来地区のように地域の人がまとまれるのだろうかと感じた。
- 「自治会離れが進んでいる」というが、前半の調査報告では加入率 90%だった。それほど進んでないのでは。100%を目指しているのか。
 - 調査結果の数値は、自治会長が認識している数。住民基本台帳ベースでみると加入率は約 75%。4 分の 1 は未加入である。例えば、アパートの住民、新興団地の人は、自治会長を通らずに未加入になっている。それらの人は、自治会への加入にこだわらず、新しいつながりをつくってもいいと考えている。何らかのつながりを持つという意味で 100%は目指したい。
 - そういった例は農地の外延部の農地を転用して家を建てた地域などで多くみられる。区長は未加入という意識はなく、「その地域は区に入っていない」という認識でいる。
- 自治会が所有する株式会社を地域内の外側の人はどうみているのか。例えば、関わりたいなどの声はないのか。
 - 関わりたいなどの声はない。自治会（100%加入）が所有している。山奥なので縁が明確にわかり、ニュータウン的な住宅開発もなく新規住民も発生していない。
 - 春来地区の人口は 170～180 人。常時いるパート従業員は 10 人くらい。そばの生産に携わる人、冬場かきもちづくりに関わる人など全てまとめると約 20 人。
- 浅見さんが関わるまでに地域コミュニティの担い手づくりにおいてリーダーシップを発揮する人はいたのか。
 - そば屋を始めた当時の自治会長は、強いリーダーシップがあったと聞いている（今は 90 代で引退している）。現在、自治会長とそば生産組合の組合長はそれぞれ 4 代目になっている。
- そばは反収が低い。一反あたり収量は 60kg（米：500kg）。1kg あたりの値段は、米なら道の駅で 400～500 円、農協に売っても 250 円前後だが、そばは 1kg あたり 400～700 円。一反あたりの収量を売ると米は 11～12 万円、そばは 2 万円に満たない。食べられるまでに手間がかかるし、ざるそばにするとところまでしないと儲からない仕組みになっている。転作奨励金が 2 万円入るがいつまで続くか分からない。
- コミュニティをどうとらえるか。「共同生活の基礎的な集団」から「共同の関心や利害を追求する組織体」へ都市化とともに変容していくといわれている。浅見氏の事例は自治会だが明確な目的がある。では基礎的な地域の集団をどう捉えていくのか。自治会の合併は難しいため、自治会よりも大きなまちづくり協議会をつくり小さい組織では難しいことを束ねてしていく流れもできているが。浅見氏の事例と玉城町を比較して、感じることはあるか。
 - 玉城町の住民は、コミュニティに対して何を求めるかなどの課題意識を持っていない。春来町とベースが全然違うので比較しにくい。都市化することで課題意識が薄れること、そこに何かを求めるか求めないかが反比例していることを再認識した。春来地区でそば屋をしたのはただコミュニティの表現だけ

ではない目的があったのでは。仮説として、外貨を獲得する拠点として、地域のボトムアップに必要だという共通認識や、まちづくりの観点から継続的に循環を生み出す拠点として必ず必要になるという視点があったのではないか。コミュニティ形成だけではない目的があったと感じた。

- 外貨の獲得は結果だった。このままだと村が廃れていくどうすればいいのかとう焦りの中で、何かしなければ、と取り組んだことがたまたまうまくいった。それを支えたのは、全戸一丸となって取り組む熱意と勢い、そばが美味しかったこと。寒暖が激しいとそばが美味しくなる。結果として外貨を獲得できた。
- 危機感について。過去に地域の組織ができる歴史の中で、危機というキーワードがある。例えば災害など。東日本大震災の時に感じられたことが地域の結びつきを強くしている、と感じることはあるか。
 - 都市部は「なぜ自治会が必要なのか」からスタートする。山元町は田舎なので「自治会ってあって当然」からスタートする。「つながりをつくらないと」「次の災害に備えないと」という危機感はない。とにかく自分の生活を元に戻したい、が先にある。地元の人の危機意識はとても薄れているように感じる。アンケートでは、隣との関わり合いも「挨拶程度でいい」と答える人が多い。昔の付き合い方との変化を感じる。
 - 春來地区の付き合いの濃さと、被災した山元町の「挨拶程度でいい」という付き合いは正反対。玉城はその中間ではないか。
 - 被災地でも、もともとあった自治会再生をしているところは結束が強い。「皆の意見を拾わないといけない」とか「仲間はずれにできない」などの意識がある。市街地の寄せ集めのところになると一定程度になる。
 - 山元町は新市街地をつくり、大規模な移転をして色んな地域から集まった。一方で、集落ごと移転した地域もある。それが違いを生んでいるような気がする。「コミュニティシャッフル問題」と呼んでいるが、仮設住宅や公営住宅に移る時にぐちゃぐちゃにされる。シャッフルをなるべくしない方が孤独死が発生しない。
 - ある山元町の区長が自分たちは3回コミュニティを潰されたと言った。1回目はもとのコミュニティ、2回目は避難所でできたもの、3回目は仮設でできたもの、そして新市街地でもう1回つくらなければいけない。短期間で4回つくるのはすごく大変。
- どこも地域のつながりが薄れてきているなかで、今後「コミュニティ」をどう捉えて、どこでバランスをとっていけばいいのか。全国的にも違うし、玉城町内のエリアによっても違うが。
 - 現在は、コミュニティを地縁社会として捉えようとしている。しかし同じ学校に通っていた学校縁、同じ学校に子どもを通わせている学校縁もある。他にも社縁、サークル縁、趣味縁など。昔は地縁しかなかった。地縁以外のコミュニティがないと村八分はすごく恐ろしい。しかし村八分の残り二分は火事と葬式で、火事と葬式はみんな協力する、という優しい社会だった。今、色んな縁の中で行政が気にするのは地縁だけ。昔の地縁社会はお葬式が出たらみんな協力しないといけないとか、草刈りは強制参加とか、選挙で同じ人を応援しないといけないとかそういうのがあった。最近は、そういう関係性は望まない人が増えている。人口が減り、参画と共同の社会が進む中で地縁社会は重要。地縁社会の在り方を考え直し、デザインをし直す必要がある。今にふさわしい地縁のあり方とは。一方で、それを邪魔するのは、長年君臨している自治会長という図式もみえる。

- 平田オリザ氏はコミュニティが重層的に重なることが地域の強さになると言った。地縁をどうとらえるかは良い示唆。人間は地面から離れることはできないので地縁は残るが、地縁だけ大きく捉えるのではなく他と並列になるのか。
- 人間は生きていくために必要な関係性を沢山持つことが重要だと思う。
- 自治会に属さないということは孤独を選ぶこと。なぜ孤独を選ぶのが気になった。日本科学未来館のウェビナーで「人はなぜ孤独になるのか」というテーマを受講した。京都大学でボノボの研究をしている山本真也先生の話だった。なぜボノボが群れを形成するのかというと、根本的にはストレスがあるから。危機という言葉も出たが、生きていく上ではストレスが存在し、ゼロにはできない。何とか対処していく必要がある。玉城と春來を比べて危機感が薄いところがあるが、玉城はストレスに感じるできごとが少なく、ストレスに対応する能力はあるかもしれないがそれが発揮されないのでは。しかし危機感をあおるのも違う。人はなぜ孤独になるのか。1つは、人と関わり合うことがストレスになるから。衣食住が足りて災害に対しても安全なところであれば、それを排除するために孤独になろうとする。ボノボが群れを形成する背景には互惠性がある。ストレスを煽るのではなく、未来志向で目標設定を大きく変えていかなければならないのでは。健康づくりを例にとると、病気を取り除いてゼロにするゼロベースにする健康づくりと、もっとより良く生きるためのプラスアルファにする健康づくりの考え方がある。今までは危機感を煽ってゼロベースの方をやってきた。それは頭打ちになりつつある。ある程度安全は保たれている状況で、そういう方法じゃない問題提起の仕方があるのではないのか。
- 自治会に参加をしないのなら、それ以外のつながりがあるということなのか。地縁でのつながりは求めている、自治会がストレスになるのでそこから距離を置きたい、などの表れなのか。自治会に属することが自分に利益ではないと判断されている。
- 農村部の環境維持は一人ではできないから、みんなで農地を守ろう、というのはよくわかる。昔は、生産と生活が近くにあり、見えやすかったものであったものが今はない。隣に住んでいる人と手を携える必要が見えにくく、優先順位が下がってきている。
- 災害が起きた時に普段から挨拶できてないと助け合えないという話がある。しかし「仲良くしておけ」と危機感を煽られてもピンとこない。
- 現実的な話として、山元町では被災時の安否確認時に自治会の区長にお願いしたことが有効だった。だから自治会を整備しないとイケないとなるのか、たまたま 2011 年にはそれが機能していて、何十年後かには別のものが担うのか、わからない。
- 地縁は身体的、物理的の近さ。テーマ的、目的別近さは距離を越えられる。例えば、WEB や LINE など。物理的の近さが優位性をもつこと、物理的の近さが必要なこともある気がするが、どう感じるか。リアルに近いということが活きることは。
- 物理的地縁に対しての価値は確実にあると思う。今まで地縁社会はすべてのことを包括していたが、情報などがどんどん細分化されて、今残されているのは削ぎ落されたもの。そのため再定義する必要性はしっくりくる。再定義＝目的をもたせるということでは。目的を達成するための手段は時代によって変わってくる。情報社会がまかなえる部分が増えることもあるし、削ぎ落とされてコアなところが残る可能性がある。コアな部分は状況によって変わるのでは。現状に対して再定義することが重要ではないか。
- 削ぎ落とされるという意見には同意。近所の人や LINE でやりとりしている。回覧板が他に変わることがあるかも。

- 削ぎ取られて残ったものがゴミの世話なのであれば、それは残念。
- 山元町の自治会の役員会で区長から「持続可能な自治会運営をどうすればいいか」について聞かれた。そのとき 50 代以下の役員から「そもそも自治会は持続可能にしないといけないのか？」という意見がでた。昔は必須だった自治会だが、若い人からすると自治会縁ではなく、別の縁があるから、自治会が持続可能でなくてもいいという発想が生まれるのかもしれない。例えば、自治会でなくても防犯灯部会とか清掃部会とか小さなサークルがいくつかあっても地域は保てるのではないか。
- 昔は運命共同体だった。今は外的要因の数えられることしか共同体ではない。地域内の循環、資本主義のあり方のようなものがみえる。コミュニティは地域内循環、地域をどう回すかにフォーカスした行為でそこ一蓮托生に考えるややこしくなるのでは。そこを切り離すことが必要で、切り離したうえで定義することが重要ではないかと感じた。
- 地縁を今一度見つめ直す、再定義する必要性、現代的意味を考える必要があるという方向が見えてきた。

⑤ その他

- オブザーバーより（学生が地域をどうとらえているのか）
 - 地区は高齢者ばかりで、昔からのつながりがある。あいさつが大切。自分たち若い世代が、高齢者の困っていること、助けてほしいことを感じ取ってしていこうといのは心がけている。
 - 昔は料理などを配り合うことがある、と聴かせてもらったが、僕の周りではそういうのはない。時代を感じた。朝会ったら挨拶するぐらいの関係。挨拶する半径（エリア）は、最寄り駅に出会うまでの道の途中で出会った人程度。
 - 地区は外国人が多く、3 分の 1 が外国の人。お年寄り同士が地区の小学校の見守り隊をしているが、外国の人とはコミュニケーションが取れていない。地区の商店街も外国の店が増えて、外国人しか利用しない。自治会がどういうものかわからない。小学校から外国の人が多く、気が付いたらそんな感じだった。

第3回玉城町コミュニティのあり方研究会 議事録

開催日時：令和3年10月28日（木）14:00～16:00

開催方法：WEB会議システム「Zoom」を使ったオンライン開催

参加：浅見雅之氏、池山敦氏、石丸隆彦氏、伊藤純子氏、名取良樹氏、橋本大樹氏（50音順）

オブザーバー：三重県地域連携部地域支援課、皇學館大学伊勢志摩共生学実習の履修学生、地域問題研究所

① 挨拶など

- 本日の流れの確認
- 各委員の近況について共有

② 小学校区を中心としたコミュニティ形成事業（内閣府）について （玉城町より）

- 地方創生推進交付金を使った3年間事業。10月からスタートした。
- なぜ玉城町が取り組まなければいけないのか（町が考える課題）
玉城町のコミュニティとして主となるのは自治区（町内会）である。
近年、自治区の力が弱くなり、地域力が低下している。例えば、自治区の加入率は、平成20年時点では82%だったが、令和2年度には74%となり、4分の1の人が加入していない現状がある。背景として、新規の移住者の自治区離れが進み、担い手不足、コミュニティを構成する人が確保できていないことがある。また新規の人を受け入れる自治区側に問題がある場合もある。具体的には、自治区によっては新しい人を受け入れていないところもある。玉城町全体のコミュニティの在り方、目指す姿を持てていないのが課題だと捉えている。
- なぜ小学校区なのか
玉城町は昭和の合併で一町三村が合併して今のかたちになった。その単位で4つの小学校が現存している。小学校区単位でPTA・農業関係のまとまりがあり、地域意識やつながりが根強く残っている。しかし実際はまとまりがあるようでないため、この事業を通じて小学校区を中心とした持続可能なコミュニティ活動を組織実行できる仕組みをつくっていききたい。現段階では、まちづくり協議会などの組織をつくることはまだ考えておらず、コミュニティの在り方としてはニュートラルな状態である。

（地域問題研究所より）

- 今年度実施する内容
 - ① コミュニティの形成方針をつくること
 - ② 各小学校区で住民が話し合う場をつくること
 - ③ 住民へのアンケート調査
- 事業実施の流れ
まずは住民アンケート、自治区の区長宛にアンケートを行い、可能な限り地域のヒアリングを行う。
- 住民アンケートについて

(概要)

小学4年以上の全住民(約14,000人)を対象に「玉城町地域の未来を考える住民アンケート」を実施する。小学生・中学生へは学校を通じて、それ以外は自治区を通じて手渡しで配布する。アンケートを通じて、ヒアリング、ワークショップへの参加・協力のお願ひも全員にする。ワークショップは各小学校区1回ずつ実施予定。

(住民向けアンケートの内容)

- ・ 基礎情報に加え『「お住まいの地域」と聞いてあなたがイメージするのはどの範囲か』(地域についてどういうところを把握しているか)を確認する。
- ・ 日頃の付き合いの状況、自治会への加入の状況などを聞く。
- ・ 自治区のどのような活動に参加しているか、それぞれの活動についてどういう風に思っているかの評価をしてもらう。
- ・ 地域活動を進めるうえでの課題を聞き、情報としてどんなものが得られるといいかを聞く。
- ・ これからの新しいコミュニティづくりについて、今後地域でやってみたい、参加したい活動は何かを具体的に聞く。
- ・ 地域で『自慢できる』『紹介したい』と思うモノとその理由を聞く。(特に集めたい情報)テーマは「人」「暮らし」「その他」。ここで収集した情報は年度末のワークショップで深堀りしながら考えていきたい。
- ・ 小学生向けアンケートは大人の簡易版の内容で実施する。

(自治区長向けアンケートの内容)

- ・ 自治区の役の内容、活動の状況、取り組んでいる活動について、頻度やどのように・なぜやっているのか、負担はどうか、今後継続が必要かどうか、などを区長の意識として聞く。
- ・ 今後の展望については、10年後問題なく運営ができていると思うかどうか、自治区として将来的にどういう方向に行きたいかなどを聞く。

(ヒアリングについて)

- ・ アンケート調査を実施したうえで、町のキーマンになる方を芋づる式に探してヒアリングしていく。次年度以降の地域コーディネーターとなっていたいただける方の候補のリストアップを今年度中に実施していく。

(委員からの意見)

- 『自慢できる』『紹介したい』と思うモノを聞くのは面白い。「人／暮らし／その他」の3つのカテゴライズの意図は？
 - ・ (答) もともと5つ程度のテーマに分けていたが、書きやすさから大まかな分類にした。この事業が小学校区の新しいコミュニティをつくるということが目的なので、課題探しより自慢探しの視点を大切にした。
- 「人」は歴史上の人物もあるが「近所の○△さん」も？
 - ・ (答) 子どもたちにも回答してもらうので「うちの近所の○△さんが面白い」という身近なことも書いていただけたらと思ってあえて入れた。
- 『自慢できる』『紹介したい』と思うモノは自由記載になっているが、どういう分析をするのか？
 - ・ (答) ワークショップのネタにしていきたい。カテゴリをつくるなどワークショップの中で使うツールの中で入れたい。

- 小学生向けのアンケートは『自慢できる』『紹介したい』と思うモノが中心のアンケートになる。タブレットを使って回答してもらう。最後は写真や絵をいれてもらうこともできる。
- 「自治区」という言葉について
町民が「自治区」というワードを理解できているのか。「自治区」が分からない人もいる。特に小学生などは「自治区」が何か分からないのでは。住所と自治区の名前が違う場合もある。大人でも自治区という認識をしてない人もいる。その理解ができていないと回答しにくいのでは。
また逆にこのアンケートが「自治区」というものがあることを伝え、玉城町では今後その自治区に力を入れていくと伝えるプロパガンダになることもできる。
- 回収率に関して
 - ・ 参考までに先日、山元町で実施したアンケートは 46%の回収率だった。事前に区長への根回し、こちらで仕分けをするなど相手の負担なく丁寧なことで高まるのでは。
 - ・ 兵庫県の佐用町でのアンケートは回収率 80%越えた。(地域主導だから?)
 - ・ QRコードを付けてWEBでも回答できるようにしようと思っている。
 - ・ 現在の玉城町はいろんなものが5割を超えなくなってきた。(例：町議選、総合計画、男女共同参画など) 以前は全て5割を超えていた。
 - ・ 行政主導のアンケートと地域主導のアンケートでは回収率が変わるのでは。
- 回収率を上げるために
 - ・ 回収率を爆上げするには、回答を取りに行くといいのでは。(⇒当初は地域の役員が取りに行く方法も考えていたがプライバシーの問題が担保しにくいので返信用封筒になった)
 - ・ 各自治区の回収率の途中経過を公開するのはどうか。(⇒自治会長のはね返りが強いのではないか)
 - ・ 返信用封筒に切手を貼ることで「もったいないから出そう」とならないか。
 - ・ 締め切り前に「ご協力ありがとうございました、もしお手元にあれば…」という内容のハガキを出す。
 - ・ 配る際、宛名に個人名が書いてあるのと書いてないのでは違うのでは。広く一般に問いかけているものではなく、あなた宛だということを伝えるとよい。
 - ・ 変な色の封筒を使う。オレンジや青など他とかぶらないような色にする。茶封筒だと失われやすい可能性がある。

③ 事例報告「保健師が行う地区組織活動の意義と方法」(伊藤純子氏より)

- **保健師の仕事**
 - ・ 保健指導(健康教育)を通じて地域住民の病気の予防や健康の維持に貢献する専門職。
 - ・ 看護師等が“病気になっている状態”に関わるのに対して、保健師は“病気になる前”に予防する、“病気や障がいを得て地域に戻ったとき”にQOLを高めることを生業としている。健康づくりの専門家。
 - ・ 資格は7万人だが、実働は4万人。98%が女性。
- **健康の実現のために注目される住民の繋がり**
 - ・ 健康はいかに作られるのか。現代の死因の6~7割は生活習慣病。健康にかか

わる個人の要因（遺伝等）は 12～13%と言われる。要因のほとんどは、ライフスタイル、保健医療、環境などに起因している。

- ・ このように健康の社会的要因は、個人の努力だけでなく、いろんな社会の影響を受けることが分かってきた。経済的な地位や教育、職業、どこに住んでいるか、住む地域の公共政策、景気などいろんなことに影響を受けている。そしてそれらには格差（健康格差）がある。
 - ・ 健康格差はなぜ起こるのか。今のところは、自身や家族の学歴・職業・所得など社会階層が低いほど、物理的・物質的な制限（買えない・サービスが使えない）があり、ストレスが大きかったり、人間関係が乏しかったり、健康に悪い生活習慣をしていたり、ということがあると考えられている。その結果、寿命が短くなり、健康状態が悪くなっている。
 - ・ 健康を実現するために、個人が行動して改善できることは限られている。健康状態は周囲から色んな影響を受けて決まるので、個人でコントロール不可能であり、全ての要因に介入し排除するのも困難である。そこで近年の考え方としては、要因を取り除くのではなく、「健康破綻の極へ押しやる力（健康状態を悪くする要因）」に対応する「健康の極へ押しやる力（健康になる力を高める）」ことで、プラスマイナスで健康にしようという流れになっている。
 - ・ 「健康へと押しやる力」について
 - ① 自助・互助
自分のことを自分でできるようになる（自助）ための支援、ボランティアや住民組織の活動（互助）を活発化することで地域の力を強めていこうとするための支援の両方が求められている。
 - ② ソーシャルキャピタル
高いと健康状態がいい、災害への対応力が高いと言われる。しかし高すぎると、よそ者の排除、役割や参加の強制などの側面もある。ソーシャルキャピタルは社会的に健康指標を押し上げる重要項目だと考えられている。
 - ③ ソーシャルネットワーク
ソーシャルネットワークとは、人とのつながり、交流の規模、頻度、持続性に注目する概念のこと。個人が持つネットワークの数や質を増やす支援の必要性が高まっている。
 - ④ ソーシャルサポート
社会的関係の中での支援。代表的なものは「情緒的サポート（気持ちの面で支える）」「手段的サポート（道具や情報などの具体的なものを提供する）」がある。
 - ・ 現代の保健師の方向性は「居場所」と「つながり」の支援にどう取り組むか、が中心的なテーマになっている。
 - ・ 保健師活動方針（2013 年 4 月）では、個人支援ではなく地域全体の課題に取り組んでいく、地区単位の活動を評価していくという方針が明示されている。
 - ・ 保健師は、個人や家族に対しても支援するとともに、それをとりまく「集団・組織」「地域」へも階層を分けてアプローチする方法をとっている。
 - ・ その流れの中で地域組織（住民組織）化活動（地域において住民が参加し、自分たちのための活動を行う金銭的な営利を目的としない組織をつくる）が重要視されている。
- 地区組織（住民組織）活動の実際
- ・ 保健師は地域組織化活動に 1877 年から取り組んでいる（伝染病、生活習慣病、震災など社会情勢に対応しながら支援をしてきた）

- ・ 地区組織化活動とは、保健師が集団に介入して、構造化し、組織化していくこと。
- ・ 住民組織化活動は地域の絆づくりに寄与すると考えられている。住民組織化活動で地域の課題（健康課題や子ども虐待など）を解決していく。例えば、訪問などの活動そのものがソーシャルキャピタルの醸成につながっている。
- ・ 今の健康づくりの中心的な考え方は地域住民同士のつながりが強まると、その力で健康を押し上げることができる。そのための方法として地区組織化活動に取り組もうというストーリーで取り組んでいる。
- ・ 保健師は、さまざまな住民組織の類型に対して多方面からアプローチしていく。例えば、スタンダードな手法では健康教室の講座を行い、そのOB会を組織化するなど。また地区組織への直接的支援だけでなく、組織と行政をつなぐ働きかけも担う。
- ・ 集団から組織へ移る流れとは。目的を持って集まったのが集団。組織になると集団にプラスして地位と役割が発生し、構造化する。組織の構造化の判断基準は、構成員の役割や具体的な目的、ルール、リーダー、組織名称などが明確化することである。
- ・ 地区組織・住民組織活動の要点は、住民が行政からの「やらされ感」を感じないこと。また保健師として地域の健康課題の発見、解決の過程を共有することも求められている

● 活動の課題

- ・ 平成の大合併で多数の住民組織が廃止された。
 - ・ 高齢化によりなり手がいない。
 - ・ 自治会等の地縁組織は排他的な傾向がある。
 - ・ 活動のマンネリ化、停滞が起こっている。
 - ・ 高層マンション、集合住宅等が増え、物理的にアプローチが困難。
 - ・ 事業担当制（例：検診など仕事ごとに担当）→地区担当制へのシフト過渡期。
 - ・ 保健師はオーダーメイド的、職人的な部分もあり、技術継承が難しい。
 - ・ 今後はちょっとした「絆」（下記③）の醸成が必要になっていく。
- ①伝統的な絆（生まれ）
 - ②近代的な絆（所属：学校・会社・家族など）
 - ③ちょっとした絆（連合：隣人・友人・同好会等）

④ 意見交換

- これまでの議論のふり返し（別紙資料：第3回玉城町「コミュニティのあり方研究会」資料（2021/10/28）参照）
 - ・ 昔の地縁はそこに土地を持つ人の関係性で発生してきた。現代では、その関係性は必ずしも土地所有者でない居住者への関係に変化している。
 - ・ 昔からの地縁は崩壊しつつあり、レジャー趣味などのコミュニティ（縁）に変化しつつある。
 - ・ 農村では昔から農作業をベースにしたつながりがあったが、近代化によりそれから外れた人が生まれた。そこで共存していく新たな仕組みが必要とされているのではないかな。
 - ・ 現代的な地縁にどういう意義や必要性があるかについて議論をしていきたい。

● 事例報告への意見

- ・ 事例報告は驚きと感動をもって聞いた。昔ながらの地縁が廃れ、所属によるコミュニティが増え、地縁社会の力は弱まりつつあるが、人口減少社会が進む中で改めて地縁を中心にしたコミュニティが見直されつつあるという流れに非常に共感した。
- ・ 災害と地域コミュニティについて。地域コミュニティの在り方として、災害の時に困るからという脅迫的につながっているわけではない。人間は本能的につながろうとする社会的動物であり、つながりこそが健康を支えているという考え方はすんなり入ってきた。集団を組織するという議論を保健師さんがされてきたことに驚いた。
- ・ 山崎亮さんが社会福祉士の教科書にすべて書いてあるという言葉とリンクしていると感じた。保健師の業務エリアと社会福祉協議会の業務エリアはかぶっているのか。
 - 課題があつて、解決できる人材、システムがあればその人にやってもらうのが保健師の考え方。新しいことや現行の法律や制度で解消できないグレーゾーン、担当する人がいないのりしろをやるのが保健師。スペシャリストがいる分野はその方に譲る。さまざまな専門家同士が有機的に連携して成果を出していくために、それぞれの専門家の言語や価値観を知り、ふさわしい人とつなげたりするのが保健師。保健師はいろんなチャンネルと話ができるジェネラリストであるスペシャリストである。例えば、介護保険のサービスがない時代は保健師がやっていた。その制度ができたら、感染症、生活習慣病と別の分野を担うようになった。
- ・ 保健師の支援者としての在り方を考えるとき、手を放す段階をどうするかは、大きなテーマである。最初は介入するが、将来的な自立支援のためにどこまで突き放していくか。最終的には助言だけ、見守るだけという関係になっていくのが良い。しかし一度介入するとその状態から抜け出せない場合もある。
- ・ 保健師には「介入」という手段がある。（行政は「支援」）その武器を持ちながらずっと引くこともできる。基本的なゴールはセルフケアで、自分たちの健康は自分たちで守らなければいけないということは、一貫してぶれない。保健師は「手を放すためにはどうすればいいか」を常に考えながら関わっている。
- ・ 玉城町の保健師は、町のサイズが小さいから地域のことを熟知できているのは有利な点。1人あたり2000～3000人。大きいまちだと1人当たり3万人などになり、きめ細かなケアができない。玉城町だと文脈を理解してきめ細かな支援ができる。
- ・ 地域づくりには保健師に巻き込んだ方がいいのか？
 - どんどん巻き込んでほしい。保健師は貪欲でオールマイティー。感覚的に、小さいところの方が有利なので、玉城町は理想的。やろうと思ったらすぐできるし、いろんなチャンネルとつながれる。
 - 保健師は地域の財産。うまく動いてもらえる関係性を作れば。地域づくりに関わる人は、保健師の仕事のことをもっと知った方がいい。
 - 今回の事業でアンケートをとって、地域のカルテできる。そのカルテをもって地域にどう働きかけていくかを保健師と一緒に考えていけるといい。

● 地縁の話について

- ・ 地縁について。土地の所有・農作業のつながり⇒居住のつながり⇒その次は「？」。今後は物理的な近接性（近さ）がキーワードなのでは。趣味のつながりなら SNS や LINE でつながれる。今後さらに IT の利用者が増えるなかで、地縁が何を担うべきなのか、またその意味を見直していくと、「近さ」にフォーカスされ、「もの」「体」「健康」「命」というところに行きつくのでは。
- ・ リアルな近接性は大切。緊急時に遠くの知り合いはかけつけられない。
- ・ 地域という田畑が財産を共有している話というストーリーがあるが、もともと財産の管理が目的だったマンションの管理団体が近年では地縁的なことをはじめていることにもヒントがあるのでは。
- ・ 近くで生活していたら共有せざるを得ない、出てくる諸問題は切り取ってしまうことができない。（例：ゴミの問題など）
- ・ 地縁という意味が変わってきている。現代では「ゴミ出し地縁」など地縁が細分化しているのでは。地縁という言葉で包括できなくなっている。個人の能力ではなく、組織力で対処しなければいけない問題に対して、単なる地縁という言葉で片付けるのではなく「○△地縁」という方がしっくりくる。また昔は地縁の弱い人が SNS で縁をつくっていたイメージだが、地縁の強い人も SNS に入ってきている。
- ・ 地縁も多様性の時代に入っている。土着の地縁、集合住宅の地縁など。コミュニティを望まないからしがらみのないところに住む人もいる。それらをひとくくりにすること自体に無理がある。行政の視点から考えると町全体で考えたいが、自治区ごとに考えていけないといけない時代なのでは。
- ・ 地縁は一種類ではない。グラデーションがある。ステレオタイプに濃いところを目指さないといけないというのはいけない。さまざまなグラデーションがあり、自分はどの位置にいるのかを見つけることに意義がある。
- ・ グラデーションが薄い場合は、多層化しているコミュニティが補完しあっているのか。そこまで地域に求めているなくても絶対ここはある、という部分がある。ゴミ捨て場など。その境界の線引きは考えないといけない。
- ・ 九州大学（元熊本大学）の徳野先生が T 型集落点検の手法で、間近の地縁にもう少し離れた 1 世代や地縁を取り入れた集落維持に取り組む事例がある。
https://www.soumu.go.jp/main_content/000588044.pdf
- ・ 地縁という言葉自体が分からなくなった。伊藤先生の話ではすでに答えがある。今までの話をしてきたプロセスが違ったのではないか。身体的に、動物的に答えがあるように聞こえた。地に根付くということが地縁とイコールなのか。ミニマムな地縁は何が必要か。外敵から守るための集団の構成を欲求的に求めているなど動物的に決まっているのかもしれないと思った。
- ・ 地域の課題を何にするか、で違ってくる。伊藤先生の話がクリアでわかりやすかったのは「健康」という課題に向かっているから。どういう目的に向かって地縁を必要とするのか、が難しい。地域が目指す姿、住民が求める姿はどうなのか。（伊藤先生は）静岡に引っ越して地縁ゼロで、直接対面でのサポートはないが、色々なサポートが整っているの、困っていない。地縁の必要性を感じられない。自分が安心して静かに暮らせる目的を達成するためには、地縁はいらない。玉城の住民が地縁に対して何を望んでいるかが知りたい。
- ・ 次年度はテーマ（例：健康、防災など）を立ててコミュニティづくりを考えて

いきたい。今年度はそのテーマを考えていく。

- ・ 健康や防災は絶対的な判断基準がある。健康な方がいいし、災害で死なない方がいいに決まっているので旗印にしやすい。そこまで単純化して考えられないのが地域の問題でもある。

⑤ その他

- 次回日程は、12月8日9時30分～を予定。

第4回玉城町コミュニティのあり方研究会 議事録

開催日時：令和3年12月6日（月）9:30～11:30

開催方法：WEB会議システム「Zoom」を使ったオンライン開催

参加：浅見雅之氏、池山敦氏、石丸隆彦氏、伊藤純子氏、名取良樹氏、橋本大樹氏（50音順）

オブザーバー：三重県地域連携部地域支援課、皇學館大学学生、地域問題研究所

① 挨拶など

- 本日の流れの確認

② 玉城町小学校区まちづくり懇話会の意見まとめ

（池山敦氏より）

- 区長、民生委員、駐在、消防団など地域の関係者に集まっていただき、4小学校区別に4回に分けて地域別懇話会を行った。

（地域問題研究所より）

- 11/9～11/18にかけて、4小学校区でまちづくり懇話会を行った。各回の参加人数は15～20名程度だった。
- 冒頭に総務政策課から「小学校区を中心とした地域づくり」を説明し、その後地問研から各小学校区の人口推移について伝えた。後半は池山准教授がファシリテーターをつとめ、参加者が5人程度のグループに分かれて意見交換を行った。
- 意見交換のテーマは2つ。1つ目は「昔（40年前）と変わったこと」。2つ目は「自治区の活動で今まで通りでよいこと、変化すべきこと」。
- 1つ目のテーマ「昔（40年前）と変わったこと」では、下記のような意見が出た。
 - ・ 社会全体（例：さまざまな楽しみが増え、地域に目を向けなくなった など）
 - ・ 住民に関すること（例：人口が減った、増えた、いなくなった など）
 - ・ 地域活動やつながり（例：祭りや地域行事が減っている、つながりの希薄化。またその背景にある個人情報の問題、世代間の考えの相違 など）
 - ・ 子どもの環境（例：どの家の子ともか分からない、通学の見守りボランティアが子どもをちゃんとみている など）
 - ・ 交通、開発・自然環境（例：便利になったが自然が少なくなった など）
- 2つ目のテーマ「自治区の活動で今まで通りでよいこと、変化すべきこと」では、意見交換の前にまず自治区の活動に対する各個人の考えを聞いた。【自治区の活動は「今まで通りでよい」or「変化すべき」】の2択を提示し、クリッカーで投票していただいた。結果、「変化すべき」が各地区で8割以上を占めていた。
- 「今まで通りよい」と回答した方の意見は下記の通り。
 - ・ 既存の地域のつながりやコミュニティ、伝統行事、活動（見守りボランティアなど）などを維持したい など。
- 「変わった方がよいこと」と回答した方の意見は下記の通り。
 - ・ 自治区（例：自分たちでは変えられない、忙しくて変えられないので町の後押しがほしい など）
 - ・ 役員の決め方（例：区長のなり手がいない、選挙で決めてもやらない人が増え

ている、1年任期から2年任期に延長した など)

- ・ 役員の仕事(例:区長の仕事の負担、農業従事者だけでなくサラリーマンなども関わりやすい仕組み、出合の外注 など)
- ・ 地域の活動の内容(例:どう負担を減らして継続していくか など)
- ・ 交流(例:交流を進めたい、新旧の自治区で交流を深めたい、空き家をみんなでお茶のみできる場所にしたい など)
- 傾向として、下外城田・外城田・有田地区は、出会いなど農業ベースの話題が多かった。田丸地区は商店街やJRに関することなど町場の話題が多かった。

(玉城町より)

- 今回、ワークショップの形式での意見交換を初めて行った。以前までは参加者同士の自己紹介と行政からの報告というスタイルだった。今回、参加者自身が話し合い、町の三役も積極的に話し合いに入るというスタイルにしたところ、話が弾み、参加者の満足度も高く、町としても心地よく意見が聞けた。計80人くらいご参加いただいたので、今後は「地域づくり100人委員会」のような次の展開を模索していきたい。そういう視点からもご意見やアイデアがいただきたい。

③ 事例報告「三重県内における地域支援の取り組みを通じて感じる課題」(NPO 法人Mブリッジ・石丸隆彦氏より)

- 自己紹介
 - ・ 中間支援(連携、協働の橋渡し)のNPO法人。地域や企業の人材育成、持続可能な仕組みづくりなどをテーマに活動している。
 - ・ 三重県事業として「みえ若者コミュニティづくり事業」「みえのみらいづくり塾」などに関わってきた。
 - ・ 漠然と「人口が減っている」と感じている地域に人口推計の推移などデータを通じて、感覚値に見える化し、問題提起をすることで、話し合いのきっかけを提供している。
- 地域支援の取り組みを通じて感じる課題
 - ◇他人事化
 - ・ 地域づくり最大の課題が他人事化だと感じている。
 - ・ 現在の地域組織は、人口(生産年齢人口)が増えていた高度経済成長時代のまま止まっているのではないか。時代の変化、ライフスタイルの変化に合わせて変わらなかった、変えてこなかった。
 - ・ 時代の変化とともに寄り合いや慰安旅行をやめた地域もある。しかし、そもそもの目的は何だったのか? なぜやめるのか?をしっかりと考えていない地域も多い。
 - ・ 現在は「みんな一緒」の時代から「個」の時代に変化し、多様な選択肢がある。「自治会に入るのが当たり前」という価値観も変化している。
 - ・ ニーズや課題が多様化し、声なき声も生まれている。降りていかないとわからない時代になった。例えば、子どもの貧困という表面上見えない課題や、ネット上での見えないいじめの存在など。
 - ・ すぐに手に入る時代、考えない時代。「今は」困っていないので、必要な情報だけ手に入ればいい、という感覚がある。かつての情報源は井戸端会議だった

が、それがなくなったことも他人事化の要因ではないか。昔は子育てに困ったら祖父母などに聞いたりしたが、今はインターネット上に情報がある。ネットは求めている情報が見つかる便利さはあるが、雑談などから偶然得られるものはない。

- ・ 上記のことがコミュニティの希薄化につながっているのではないか。

◇問題提起ができているのか？（これでいいの？）

- ・ 地域の組織では、トップや重鎮の考え方が基本になっている。「どう感じるか」「どう思うか」を考えていないし、聞いていない。
- ・ 今まで通り（例：会長の輪番制、くじ引きなど）の流れが主流で、より良くしよう、流れを変えようという動きには責任が伴う。そもそも現状がいいのかを立ち止まって考える機会自体もない。そういった地域を変えていくには、問題提起ができる第三者（地域・行政ではない立場の人）の必要性がある。
- ・ 「これでいいのか」の投げかけの一つとして住民アンケートを行ってきた。地域住民の声を可視化している。またアンケートをとって終わりではなく、それをもとに対話することが重要である。それらのプロセスを通じて自分事になっていく。

◇その中に存在する壁

- ・ 役員会の壁（今まで通り、過去への固執）
地域の代表が地域計画をつくるときにアンケートを実施しようとしたが、地域計画では以前行った別のアンケートをベースにすることが役員会で決まっていたため、個人の想いや一存では通すことができなかった。
- ・ 予算の壁（アンケートへの理解）
アンケートの実施には印刷費等それなりの予算がかかる。なぜそれに予算を使うのかを住民に理解してもらうことが必要になる。実際に予算をとって実施された地域は、事前に各自治会で説明会を開くなど丁寧な根回しがあった。
- ・ 決めつけ、当たり前の壁（世代、立場）
地域の役員は「若い人が参加してくれない」と言うが、若者の声を聴くと「そんなことをやっているのを知らなかった」「どうしても仕事の関係で行けない」「声をかけてもらったら行くのに」…などのさまざまな声がある。役員らが若い人という一括りでアプローチをせずに決めつけてしまっている。
- ・ 身内だけの壁（自分と考えが違う時の批判、対立）
自治会は住民だけのコミュニティなので、外部の人間が入ることは有効である。身内だけだと自分と考えが違う時の批判、対立などが生まれやすい。それらは地域づくりを進めていく上では壁になる。
- ・ 法律・条例の壁（市街地調整区域、個人情報）
法律の関係で農地の売買などがしにくいなどの課題がある。
- ・ 仕組みの壁（住民協議会・まちづくり協議会）
市町によってさまざまな組織体を行政主体で立ち上げている。作ることの良し悪しの議論はしないが、地域運営組織を行政主導で作った地域は、住民が何のためにそれができたのかを理解できていない場合が多い。一方、ないところは、新旧の住民のつながりのつくり方、コミュニティをどう作っていくかを課題に感じている自治会が多い。「あるからいい」ではない。今後どういうものが必要なのかを考えていく必要がある。

◇まとめ

どの壁も住民の声を聴く必要性、対話の必要性がある。玉城の地域別懇談会のような話す場が改めて必要だと感じている。

● 委員からの意見

- ・ 三重県の地域で起こっていることは、宮城県でも全く同じだと実感した。
- ・ 石丸氏への質問。玉城町の区長会に女性が増えてきた。先日の区長会では5～6人おり、ご夫婦での参加もあった。地域の組織は「変わらない」と言いながら、少しずつ変化も実感している。これまで関わるなかで変化を感じたことはあるか？
 - 地域計画を作る際に、これまでは役員が中心に決めてきたが、最近は「住民の声を聴こう」という地域も増えている。また「今のままではだめだ」と感じる人も増えてきている。ある地域では、地域の中の若手（子育て世代、中高生になり子育てが手離れした世代など）が地域で子どもたち向けにイベントを企画している。既存の住民組織とは別の組織を立ち上げ、地域の既存組織の役員の人も自然と巻き込んでいる。若い人たちの活動をフォローする自治会、のような関係性が地域の中でうまく回っている好事例である。
- ・ 地域運営組織を立ち上げるときに、小学校区をまたいだ協議会をつくろうとする地域があった。小学校区が違うとなかなかうまくいかないケースが多い。領域の設定の問題がある。
- ・ 地域組織の会議で意見を引き出す工夫について。山元町（宮城県）で地域住民にアンケートを取り、結果報告した。参加者は30～70代。報告終了後、意見をわざと若い人から聞いた。若い人は将来のことを語り、高齢の人は今のことを語る傾向がある。若い意見から聞くことで、何となく雰囲気が変わった。若者が先を見た、まっとうな意見を語ると議論が前向きになった。
- ・ 地域と関わる時に意識しているのは、承認欲求を満たしてあげること。地域の人には文句しか言わない。出会い等にも「出てくるのが当たり前」だと考え、出てこない「なぜ出ないのか」と言われる。例えば、若者が初めて参加したときに全力で「来てくれてありがとう」と伝え、「また行こう」と思えるのではないかと。また役員らに対しても、大変さのなかで地域を担ってもらっていることを誰かが認めないと、その人たちもメンタルが疲弊してしまう。そこはよそ者でもできることと思う。

④ 意見交換

- 第4回目玉城町「コミュニティのあり方研究会」資料（2021:12:06）（池山敦氏より）
 - ・ 地縁をアップデートする時代に入っている。グラデーションの中に、さまざまな地域が存在する。地縁組織の役割の最小限はどこか。新書『どこまでやるか、町内会』（紙屋 高雪・著）では、著者自身が町内会長をやった経験から、地縁についてどこまで切り捨てられるかが書かれている。地縁組織の役割としてリストラはどこまででもできるが、できないものとして「コミュニティ意識（※）を育てること」「地域住民の代表として意思を表明すること」をあげてい

る。(※)コミュニティ意識…この地域の一員であるという意識のこと。

- ・ コミュニティ意識≡地縁「関係」と考えるならば、必要なのは「関係性」あるいは「意識」であり「組織」ではないのではないか。しかし「意識」を育てるには「組織」が必要であるとも言える。
- ・ 協議会制が増え、県内でも 11 市町で導入されている。全国では 5783 組織あり、全国的に増加傾向にある。
- ・ 地縁が削られていくことで、担えなくなったものを誰かが担わないといけないうい。ミニマム地縁でリストラされた機能を補完するのが地域運営組織ではないか。
- ・ 今ニュータウンでその組織を作り上げる作業をしている。自治会は加入率が 60%、婦人会は婦人だけ、老人会は老人だけ、PTA は親御さんだけ。どうやったら意見を代表できるかを検討した結果、任意でどんな条例にも則らずに「地域の市営住宅の跡地をどう使ってほしいか」の意見を述べるために全戸に働きかけて「唐櫃の未来を考える会」を作った。地域の意見代表を標榜することは、とても難しいことだと感じている。
- ・ 災害のあとでまちづくり協議会が作られるパターンがある。住民の意見を代表する組織が必要になるから。「共通の敵」と捉えられるような災害やマンション建設反対など、ネガティブなきっかけでポジティブな組織ができあがるパターンはよくある。
- ・ 地縁組織の歴史を紐解くと「危機」の存在は大きい。ゆるやかに考えると高齢化や人口減少も一つの危機ととらえることができるのではないか。
- ・ 人口減少は、危機として派手さが足りないのでは人が集まるきっかけにならないのではないか。また、ネガティブなスタートラインが良いことなのかも分からない。例えば、災害のときに支え合うのが大切だから地域で仲良くしておこうというのは本当に正しいやり方なのか。災害の時に支え合うために仲良くなるのではなく、人はそもそも仲良くなりたい生き物だから仲良くなるのではないか。
- ・ 三重県としては、各市町の協議会を全ては把握ができていない。市町と情報を共有しながら進めている。
- ・ 「共通の敵」から生まれたコミュニティづくりの事例について。現在、青山高原に中部電力の発電所があるが、開発当時は地域住民らの反対運動があった。住民らは反対運動をするなかで、反対運動だけ起こしてはだめだと気づき、自治会を超えて人が集まり、地域づくりに取り組み始めた。その後、祭りやイベントも継続され、移住者も増えて 20 年経って良い循環が続いている。
- ・ 「他人事化」というキーワードが気になった。課題意識がない＝自分事化していない状態の中で、地区別懇話会でアンケートを取ったら、変化を求めていることだけは分かった。今の玉城町では、住民のライフスタイル自体は限りなく都市化するなかで、地縁コミュニティだけが取り残されているように感じる。そこにズレがある。地域住民もそのズレを感じている。「求めるもの」と「今ある地縁コミュニティ」のはざまで、漠然と変化が必要だと感じている。そんな状況下で、他人事化している人に「方向性を出してほしい」というのは酷なことではないか。やはり、そこは行政が旗振り役になる必要がある。ある程度の方向性を指し示すことと、コミュニティを作り上げるときのオペレーショ

ンは分けて考えた方がいい。方向性を指し示した後に地域住民がこの方向性でいいのかどうかを考えるということを通じて自分事化させてはどうか。そのアプローチがなく、オペレーションの中で住民自身が方向を見出していくのは難しいのではないか。方向性を示し、住民自身も考えてもらったうえで調整していくプロセスが必要だと感じた。災害など「共通の敵」を置くよりも、もう少し上位階層のコミュニティの定義、玉城町側から地縁組織に対して「コミュニティがこうあるべき」という投げかけが必要ではないか。

- ・ 阪神淡路大震災後の二段階都市計画について。1/17に災害が起きて、3/10に神戸市が壊滅的な被害を受けた地域の再開発の計画を発表した。それをきっかけに住民に反感の火がつき、住民が結束して、結局は良い形になった。神戸市は、これを二段階都市計画（最初に適当なものを出すと、みんなが結束していい案がまとまる）と呼んでいる。
- ・ 役場からの意見。地域づくりは、そもそも誰のためのものなのか。役場としては、自治区のことには行政が指導していいのか、住民の皆さんが考えて作るのが理想ではないか、というブレもある。しかし、やるからにはある程度示していかないといけないのもわかる。
- ・ 役場からの意見。さまざまな意見をうける覚悟はある。このテーマはすり減ることが多いが折れずにやっていきたい。
- ・ 玉城町がコミュニティの在り方をどうするかを検討し、提示をするものが決まってきたら、例えば、協議会制、もしくはコーディネーターなどの支援者がいるから相談できる、という選択肢の示し方もあるかと思う。何か困りごとがあればコーディネーターと一緒に考えられる、というような。
- ・ 役場からの意見。玉城町として、20の自治会に再編を強行に進めます、というのと、大変なことになるか？（20は民生委員のエリア数）
 - 大変なことになるのでは。
 - 山元町（宮城県）で行政区を再編する話があった。行政的には区割りを変えて融合させたい思いはあったが、地域に伝えるタイミングをはかり、最終的には伝えられなかったということがあった。住民らは、他地域の人と一緒にすることに対する抵抗感が大きかった。しかし話し合いを通じて地域の課題をすべて出してみると、住民らの共通意識として10年20年先も今の区割りで行くのは難しいという合意を得ることはできた。そこで町としては、5年後はこうする、10年後はこうする、というプロセスを提示した。現状は、将来的には区割りを変更する可能性があるのでその時には協議をするという話になっている。
 - 山元の場合は、行政区と自治会の区別がついていない住民が多く、行政区の区割りをかえると自治会エリアも変わると思う住民が多くいた。ひとつずつ説明していかないと地域の人には混乱してしまう。
- ・ 自治区は町が決めるものではない。町が自治区を設定することはできるのか。明治時代に市町村制ができたときに旧村単位を区と置き、それがそのまま引き継がれている。
- ・ 田丸地区のように細かい区切りは必要なのか。自治会運営ができないところは、連合自治区など何か方法を考えればいいのか。
- ・ 指し示すものとして「10年後、20年後にはこうしたらどうか」という考えを

示すのはいいのでは。二段階都市計画のように「では、あなたたちはどう思うか」というのを導入にするのは、いいかもしれない。

- ・ サンドバックになる人が必要になる。山元町では、1年くらいかけて地域との関係性を作った。関わり方としては、結論を導き出そうとするのではなく、議論を活性化させるために「何かしらのイメージ」をもって働きかけるのが良かった。結果論になるが、意思決定のプロセスをどれだけ地域住民が体感できたか、参画できたか、はその後に大きく関わる。決まったことを地域の人が堂々と説明できるようになるのが理想。
- ・ 玉城町で自治会長にアンケートの配布を依頼したら、大爆発した。一段落したが、自治区が住民なんか把握しているわけない、という意見もあった。個人情報壁以降、誰が何人住んでいるか知らないという状況にまで進んでいる。働きかけるなら、自ら叩かれに行くことも必要。
- ・ 何かを示して、議論を深め、自分事化する題材にするのはよいのではないか。そのときに危機を示し、恫喝的なアプローチになりがちだが、そこは要検討すべきだ。

⑤ その他

- 次回日程：2月8日10時～（予定）

第5回玉城町コミュニティのあり方研究会 議事録（未定稿）

開催日時：令和4年2月8日（火）10:00～12:00

開催方法：WEB 会議システム「Zoom」を使ったオンライン開催

参加：浅見雅之氏、池山敦氏、石丸隆彦氏、伊藤純子氏、名取良樹氏、橋本大樹氏（50 音順）

オブザーバー：地域問題研究所

① 挨拶など

- 本日の流れの確認

② 報告「IT と地域～これまでの取り組みの例～」

（鳥羽商船高等専門学校 准教授中井一文氏より）

- IT（DX）を考えるときの技術者側の視点（3つ）

視点1）技術者はだいたいの要望には応えようとする

- ・ 要求定義から要件定義へ
要求定義の例）

「過疎をなんとかしたい」

⇒具体的には？ 例：今の住民が最後まで不便をせずに生きられるようにする

⇒不便をしている理由は何なのか？を考えていく。何をすれば要求を満たせるのかを要件定義していく

視点2）「技術的には可能です」（お断り言葉）

- ・ 開発コスト（人、時間、お金）
- ・ イニシャルコスト（ユーザー全員に使ってもらえるようになるか）
- ・ メンテナンスコスト（ユーザーに丸ごとシステムを渡して使い続けられるのか）

視点3）ITは万能ではない

- 各取り組みの報告

〈志摩市〉

間崎島買い物支援（もやい）

- ・ 人口60人程度の離島（間崎島）の買い物支援システム
- ・ 志摩市社協からの依頼
- ・ 志摩市阿児町のイオンの商品を船で運び、島民からの注文票に従って仕分けするシステム。志摩市社協の職員が注文の取りまとめをしていたが、発注作業がすべて手書きのため、煩雑になって大変だった。
- ・ 初めに依頼されたのはタブレット型の注文システムだったが、最終的に作ったのはエクセルのフォーマットの整形とソートのマクロになった。

★ポイント

- ・ タブレット型の注文システムも作ることは可能だが、開発にかかる時間を考えるとあまり意味がなかった。（使うのは住人10人程度、職員1人が使う程度の規模感）
- ・ 開発時間は1週間程度だった。ICT というと大きなプログラムを使うイメージがあるが、ユーザーの使い勝手を整えるだけでも ICT になる。

波切じやまテラスのマルシェ支援

- ・ 過疎地域のマルシェ。細い路地の地域住民が主に参加するマルシェを月 1 回実施する取り組み。
- ・ 密を避けるために混雑状況の可視化をしたいというオーダーだった。
- ・ 初期の要望はコロナ対策（密を避けたい、密になった際に検知・誘導をかけた）+サブ的に市への報告用に入出りの人数か滞在人数を知りたい

★ポイント

- ・ 人間を画像から検出し「人間が写り続ける場所＝混雑」と推定するシステムを作った。混雑した際に子どもの画像（AI 画像）から呼びかけする仕組みも作った。
- ・ 実際には買い物をしたらすぐに帰る人が多く混雑しなかった。
- ・ サブ的なオーダーだった、出入り口に設置したカウンター（消毒容器型で入数がわかる）が一番喜ばれた

〈玉城町〉

元気作り体操用の体調チェックアプリ

- ・ 玉城町のげんき作り体操の参加者の体調を記録するもの
- ・ 紙からタブレットに置き換えることでデータ化を容易にするねらいで実施
- ・ 紙の記録シートを利用していたときは、筆跡や文字のはみだし具合から簡易的に認知機能のチェックを行っていた。本システムでは従来の方法でチェックはできないため、新たな方法でチェックをする必要があった。結果的に BGMとしてランダムに童謡を流し、利用者に正解の曲名を選択してもらうかたちにした。

★ポイント

- ・ 曲名当ては楽しみの一つとして喜ばれた
- ・ 紙に比べると入力に手間取った
- ・ コロナ禍でげんきづくり体操が中止になった（使用されない）
- ・ タブレットアプリの利用は単年度で終了し、Google フォームを利用したデータ集約に変更された

観光案内アプリ（ぶらり田丸城址）

- ・ 観光案内アプリとして田丸城を総合プロデュース

★ポイント

- ・ 使用説明のために学生が同行したのが一番喜ばれた

地域課題のゲーム化（マチシルクエスト）

- ・ 玉城町の現状を R P G 風のゲームで知る。

★ポイント

- ・ マチシルクエストの有効性を検証するために、知識の定着の仕方を比較した結果、学習に必要な問題に対して「マチシルクエストで学習した人」「紙で学習した人」「学習しなかった人」の群に分けるとマチシルクエストで学習した人がもっとも定着率が高い結果が出た。

③ 報告「小学校区を中心としたコミュニティ形成事業について」（地域問題研究所より）

● 玉城町地域の未来を考える住民アンケートの速報

- ・ 小学4年生以上の住民 14116 人を対象にしたアンケート。
- ・ 回収は 6127 票（一般住民 5,241 票、小中学生 886 票）、43.4%の回答だった。
- ・ 性別：女性が若干多い（玉城町の男女構成も若干女性が多い）。
- ・ 年齢：10代20代は少なく、60代70代がボリューム層になっている。
- ・ 自治区：住民活動が活発なところは回答率が高い印象がある。
- ・ 玉城町の出身者かどうか：30～60代は出身ではない方の比率が高い。しかし50代以上になると出身者ではなくても居住年数は20年以上の方が80%。また比較的新規の住民も多く見られた。
- ・ 仕事：男性は70～80%が正社員。女性は30～50代はパートアルバイトが多い。仕事を持っている女性が多い印象。
- ・ 通勤通学先：男性は伊勢市、松阪市の割合が多く、女性は町内などが多い。
- ・ お住まいの地域と聞いてイメージする範囲：10～50代はほとんどが「玉城町全体」と答えた。60代以上になると「自治区」をイメージする人が増える。
- ・ 地域との交流の範囲：「挨拶をする」と答えた人が85%以上で、他の回答を見ても3～4割の人は地域の人と密に関わっていることが分かる。
- ・ 自治区への加入：入っている人が75%と多いが、50～60代でも「入っていない、分からない」と答えた人もみられた。
- ・ 自治区に入っていない理由：「必要性を感じない」「入れてもらえなかった」「煩わしい」など。
- ・ 地域活動への参加状況：自治区に加入しているのは約75%だが、活動に参加しているのは約45%という結果だった。参加していない人も約33%みられた。
- ・ 今後の自治区の活動について：「今まで通りでよい」という回答が半数を占めるが、内容によって「活発にしてほしい」という回答もみられた。
- ・ 地域活動の課題：「若者や仕事を持つ人が参加しにくい」という意見がもっとも高く、「役員の負担が大きい」が続く。「必要性が感じられない」という意見もみられた。
- ・ 自治区の情報発信：広報回覧・防災無線が多いが、メールやSNSという意見もみられた。
- ・ 地域でやってみたい・参加してみたい活動：一番高いのはスポーツ。高齢者や子育て世代などそれぞれのライフステージに応じた関心の高さが見られた。
- ・ 地域の活動が活発に行われるために必要なこと：「知ってもらうこと」という意見が最も多かった。

● 質疑、感想など

- ・ 地域活動の課題について「若者や仕事を持つ人が参加しにくい」という意見は、

誰が答えているのか。若い人が言うなら改善を考えるべきだが、この言葉は最初から諦めている高齢者のステレオタイプの答えに多い。クロス集計が見てみたい。

- ・ 玉城町内にいると、比較するものがない。皆さんのお住まいの地域とのギャップなどがあれば教えてほしい。
 - 若い人の行政区に対する感覚が広い感覚を受けた。茅ヶ崎市に住んでいるが市全域に住んでいるという間隔が全くない。駅周辺に住んでいる感覚である。
 - 親族が住むのは志摩市阿児町鵜方だが、所属は地区というイメージ。現在、鵜方には住んでいるが自治会に所属しても自治会活動はしていない。直近で鳥羽への引っ越しを検討しているが、鳥羽は自治会活動が活発そうなので参加しようかと思っている。
 - 「どこに所属しているのか」という答えは、聞いた人が誰かによるのではないか。例えば、北海道の人に聞かれたら県名を答える。そういうことがアンケートの中で起きていないか。(⇒実際に「聞かれた人による」という回答があった)
- ・ 「どこに帰属するか」という感覚には学校が紐づいているのではないか。廃校などが地域に与えるインパクトの大きさを感じた。
- ・ 地域との関わりの濃淡で、地域を見る目の解像度が変わる。自分の肌に近い場所を地域だと感じているのではないか。
- ・ 自治会に加入していない理由の2番目が「入れてもらえない」だった。「入れてもらえない」ということが事実として本当にあるのか。あるなら、入れてもらえなかった理由の方が問題ではないか。「誰からも説明されていない」という状況を「入れてもらえない」と感じているのではないか。
- ・ 町では転入の手続きの際に、自治区への加入の希望の有無を確認している。希望された方には自治会長の連絡先を伝えている。
- ・ 「自治区に入れない」という事例が身近にあった。40 年位前にできた新興住宅地の周辺に最近 10 軒単位で住宅地ができた。その時、自治会に入れるか入れないかでもめて、結果的に入れなかった。個人で入れてもらえないのではなく、複数単位で入れないという場合もある。
- ・ 新興住宅が旧来の自治区にくつつくのは難しい。時間が経てばできるのか。しかし、現在空き家が顕在化していくなかで、新規の人を入れずに自治会活動を持続していくことができるのだろうか。
- ・ 既存の空き家に入ってきた人を入れるか、入れないか、という問題もある。住宅地の場合は入りやすいかもしれないが、農村部の場合は、財産区の問題やよそ者は入れない地域性などで難しい場合がある。

- ・ 玉城町では数軒単位で新興住宅地ができるときにゴミ収集の管理をする人をつくることが開発の条件になっている。
- ・ ゴミ置き場の管理などハードウェアで自治をコントロールしようとするのはゆがんでいるのではないか。「災害が起きたときに協力する」とか「ゴミ置き場を管理する」ためだけに自治会をつくるのではないのでは。自治とはどういうことか、住民の自治力はどういうことを考えないといけない。
- ・ 自治会に入るメリットがなかなか伝わっていない。ゴミ収集だけでいいのか。
- ・ 自治会に入れない人の会をつくるのはどうか。しかし、町がそこに関わるのは現実的に難しい。
- ・ 山元町（宮城県）の場合、1 自治区（行政区）＝ほぼ「1 自治会」である。しかし玉城町は、その前提そのものがない。自治区といえば「自治会」のことだが、そこに行政はタッチしていない。自治会をつくっていることについて届出しているわけではないが、自治会をつくっていることは役場が知っている。ふんわりしているが、だからうまくやってこられた部分もある。
- ・ 自治区に入らない（入れてもらえない）問題についても、どちらかが拒絶している場合に行政が指導を入れられない。
- ・ 「入りたい」という希望がかなえられないのはいいのか。職員がしっかりフォローしていく必要がある。

④ 意見交換「小学校区を中心としたコミュニティ形成事業における方針について」

● 新しい地域コミュニティづくりの方針（たたき台より）

- ・ 地域問題研究所の試案。
- ・ 自治区の問題が現実的にある中で、地域のつながりからこぼれてしまっている住民が多々ある。新しいコミュニティを進めていくときに、エリアにとらわれない新しいつながりづくりをしていく必要がある。
- ・ 今後必要となるコミュニティの姿は、すべての住民が玉城町の中で誰かとつながっており、誰一人取り残されない状態。例えば、若い人ほど玉城町外の人とつながり町内につながりがない場合や、高齢化してから自治区に入った人が自治区からこぼれおちると独居老人になる場合もある。
- ・ それらをなくすために住民活動、取り組み、活動を活発化しようというのが狙いである。ネガティブな問題点を解決するだけでなく、どう住みやすい街をつくっていくかが大切である。
- ・ 色んな住民同心のつながりを作っていく。自治会に入る人、入らない人、移住者、昔から住む人、在勤者も含めて色んなつながりのなかでできることを考えていきたい。題目としては「U I ターンが増えて定住人口関係人口を増やしたい」というのがあるが、安心して住み続けられる、楽しく暮らしやすい、魅力

的、自慢できるということを目指していきたい。

- ・ その手段として、自治区を中心としただけでなく、NPO等の様々な活動を作り出していきたい。従来の地域コミュニティづくりは、ほぼ自治会で行われており、それでまかなえていた時代もあった。しかし現代では新規住民も増え、自治区の住人の高齢化も進んでいる。活動に参加しない人も増え、自治区の運営自体が厳しくなっている。今後加入促進しても、果たして対応していけるのか。おそらく自治区だけで解決できない課題も出てくるだろう。そこを住民同士の新しいつながりの中で解決していけないかと考える。自治区は軽視せずに、自治区は近隣のつながりの基本的なものとして持続していく（続けるために中身を変えていく、精査していくことも必要だと考える）。一方で自治会以外の住民による自立的なつながりや活動を、自治会と両輪で作っていく必要がある。自治区と切り離すということではなく、存在意義を認めながら、新しい展開も作っていききたい。住民による自立的な活動を促進していく。
- ・ 地域の課題解決、魅力向上という活動を自立的な活動のなかで取り組みたい。活動内容やエリアについて想定はしたが、基本的には柔軟に考えていきたい。例えば、町外と連携してやる場合もある。既存の団体（NPOやPTAなど）だけでなく、任意のグループが取り組む場合もあり得る。「つながりづくり」なので、個人の活動の支援はしないが、さまざまな形を考えていきたい。
- ・ 住民の活動を支援する中間支援的な役割も必要になる。それが「100人委員会（仮）」というアドバイザリー会議になる。住民が活動をしたいときに寄り添い、コーディネート、アドバイスしてあげられるような存在。自治区がチャレンジしたいときもこの仕組みを使えるようにすると良い。それぞれの活動に対して、玉城町が直接支援するのではなく、アドバイザリー会議を通じて、支援・協議をしていくことになるのがいい形では。
- ・ そのためまずは、住民が日常的に語りあう場が必要。出発点は小学校単位を検討している。やりたいことが見つかったときに誰かに旗を立ててもらって、活動をトライアルしていくことで来年度を動かしていく。自治区、地域とのつながりのなかで、小学校区単位で協議会をつくるという話も出てくるかもしれない。協議会制などについては、町として住民と必要性の議論をしていくことが必要である。

● 池山氏より

- ・ この研究会では、地域コミュニティはどういうことか、地域コミュニティをどう持続可能にしていくかについて議論してきた。地域コミュニティの中に地縁組織（目的別でない／目的がある）と組織に属していない住民が存在する。またその外部には地域性のないグループなどがある。
- ・ 次年度以降は、テーマ別の旗を立てて、テーマ別に議論をしてもらうようなワ

ークショップなど実証事業の段階に入っていくのでは。地域のコミュニティには、自治区のような基礎的な役割と橋渡し型の役割がある。次年度以降に創っていかうとするコミュニティは、自治区を超えたゆるやかなつながりでつながりになっていくのでは。地縁のコミュニティと、テーマ別のそれと両方活性化することで、網目が編まれていくイメージ。また自治会の中でのつながりもそうだが、自治会同士のつながりもつくっていければ。

● 意見交換

- ・ 同時多発な多様なコミュニティが生まれると役場が困るのでは。もれなく誰も拾えているという状態があるのか。それでもどこにも所属しない、置いて行かれる人をどう拾い上げていくのか。
 - 自治区の役割をどうとらえていくのかについて。従来の捉え方としてはコミュニティ＝自治会のイメージがある。自治会を縮小させるイメージはない。自治会とそれ以外のコミュニティを両輪で話をしていくのがいいのではないか。そういう位置づけで進めていきたい。行政と町民一人ひとりがどうつながりをもつかは、また別の議論が必要な話題でもある。玉城町として、住民一人ひとりと何かの組織を通じて繋がっていかうという問題意識があるか、役場として繋がってなくても社協や民生員との関わりも含めて考えるのか。議論をして見つけていくことが必要。
- ・ 町として、まず今年度は地域コミュニティの在り方について「こんなことを考えている」というイメージを示したいと考えている。
- ・ ある宮城町の漁村の自治会では「あそこのおばあちゃんはどこで寝ている」「何で困っている」などを完全に把握していた。この関係性があれば、行政が自治会話を聞くことで地域の課題が全て把握できる。しかし現在の多くの自治会ではそこまで把握できていない。住民が行政とつながるためには、自治会が嫌いでも所属しないといけないという軋轢が生じているのでは。行政が町民のことをどのように把握していきたいのか。住民や地域にとっていいことは、いろんな網目があることではないか。
- ・ 以前、自治会長にアンケート配布を依頼したところ、区長から「在所の家を全て把握していない」という反発があった。世帯主は把握しても、家族構成まで把握していないという。言い分としては「知ろうと思っても知らせてもらえない」「個人情報壁」など。
- ・ 住民の状況をどれくらい把握していくのか。住民のコミュニティをレイヤーがあるイメージでとらえてはどうか。基礎があつてそのうえに重なっていくイメージ。基礎は自治会。それは変わらないし、今までの機能はそのまま基礎（自治会）が担う。そのうえに重なるレイヤーに別のものが増えていくのでは。それが協議会なのか、自治会なのかという議論ではなく、基礎の自治会の中に、

もう一つレイヤーが重なり、その中にさらにテーマ別のコミュニティができていく。そして、全てのレイヤーに関わっていくのがアドバイザー会議なのではという認識をした。住民に接していくには、まず基礎（自治会）から。加入率から 75%には接しているという現状は十分ではないか。

- ・ 基礎（自治会）が財産区の場合、共有できなかったり排除されたりする話題が発生する。今まで行政が自治区をふんわりと把握することであまりいい部分があったが、厳密に決めようとするとうまくいなくなる。基礎とするなら行政が線引きしていくといいが、そうすると大暴乱がおきるのでは。
- ・ 基礎（自治会）のひとつの試案としては、自治区同士をゆるやかにつなげていくというイメージもある。自治区の皆さんの情報が巡回するようにする。玉城町の農村部でも準会員、自治防災組織などハイブリッドな方法をしているところがある。人手不足なのは自治会の長老も分かっている。横のネットワークができれば、他者のやり方を見るなどして少しずつ変化が生まれるのでは。
- ・ 町として、保健師はほぼ全員の子供たちを知っている。高齢者の担当は全員知っている。一方で区長の形骸化をどうしていくかも課題になっている。
- ・ 現状では行政が求める自治区の機能は崩壊している（行政が求めるものにはなっていない）。その状況の中で、75%をベースにしていいのだろうか。ベースに入らないと暮らせない状況を作ってしまうことにならないか。行政がベースにしていくという意思があるなら別だが、意思もなく、介入もせず、それをベースにすると言うと「25%の水を止めます」と言っているように聞こえる。それを補完するものが、今回地域問題研究所から提示したものになるのかと考えている。ベースにするという考え方自体をどう捉えればいいのかを、聞きながら考えた。
- ・ 自治会に入るメリットとデメリットの収支が見えにくくなっている。メリットが「防災時に役立つ」だとしても、その時にならないと分からない。アンケートなどを見ても「自治会に入って困ったことはあるか」が「ない」と答える人がいる。25%をコミュニティにどうやってつなげていくかが重要。網目をいくつつかくことで、それを拾い上げていけるのでは。自治会に加入しないことは何がデメリットなのだろうか。
- ・ 自治会に価値を置いてもらうための促進の活動と、インフラの観点をイコールにできるのだろうか。できたら理想かもしれないが、そこがイコールにできないからみんな困っている。昔からの感覚の人間は「自治会に入っていない」という状況が理解できない。
- ・ 自治区＝インフラに向かうなら、自治区で起こっている問題を精査しないといけない。「自治区に入れない、入れてくれない」という問題の背景には、財産区の問題、宗教の問題、区費の問題（農村地域は高い）、また賃貸住宅の方

には伝わっていないという問題があるのでは。インフラに向かうなら、根本的に自治区の在り方を見直したうえでインフラにする話をしないといけない。区長も何とかしないといけないという問題意識は持っている。自分の意思で変えていくのは難しいが、町が背中を押すことで動きやすくなることもある。

● 最後に一言

- ・ 玉城町と山元町ともよく似ている。令和型の街づくり組織をつくるために 10 年くらいかけて取り組んでいかなければいけないテーマである。(橋本氏)
- ・ 研究会を通して、地域や自治区の多様性をどう捉え、どう方向づけていくかを議論していくかがポイントだと感じた。まずは多様な意見を聞かないと分からない、聞くことがスタートだと改めて感じた。(石丸氏)
- ・ 少数派（加入されていない方）に目を向けた議論は大事だが、玉城町は本来的に問題があるわけではない。すでに魅力的な地域である玉城町を、住民自身が住みたい町として自信を持って暮らしていくためのつながりが大事だと思う。もっと良くしていくための、という視点から離れないで次のステップに移行できれば。(伊藤氏)
- ・ 玉城町は規模感がちょうどよい。最適規模の社会実験ができる。規模が大きいと、新しいやり方を始めるのは難しくなる。玉城町はさまざまなことにチャレンジできる規模なので、新しいやり方がかならず発見できる。例えば、県など周辺市町がどう言おうと玉城町の幸せを考えて、それを打ち出せたら、唯一無二の地域になれると思う。(浅見氏)
- ・ 普段の仕事のフィールドが地域づくりとは遠かったが、貴重な意見をたくさん聞いた。半年くらい玉城町に住むことで、わがごととして捉えられる気がした。(中井氏)
- ・ コロナ禍でなかなか活動ができないなかで玉城町を知る機会になった。(名取氏)
- ・ これまでは「コミュニティ＝自治区」だったが、テーマ別につながっていくことも大切。協議会制のようなゆるやかなつながりでつくっていけないか、をこれからも考えていきたい。(池山氏)

玉城町 まちづくりアンケート 2.01

～みなさんの声をお聞かせください～

アンケートの当てはまる項目の数字ひとつに○を付けてお答えください。問は16まであります。
「いくつでも」または「3つまで選んで」という場合には、その問の説明に従ってご回答ください。
ご回答は統計的に処理し、個人を特定することは一切ございません。

(1) あなたについて教えてください

問01 あなたの性別を教えてください。

- | | | |
|-------|-------|--------|
| 1. 女性 | 2. 男性 | 3. その他 |
|-------|-------|--------|

問02 あなたの年齢を教えてください。

- | | | | |
|---------|---------|---------|-----------|
| 1. 10歳代 | 2. 20歳代 | 3. 30歳代 | 4. 40歳代 |
| 5. 50歳代 | 6. 60歳代 | 7. 70歳代 | 8. 80歳代以上 |

問03 ご家族について教えてください。ご同居のご家族はあなたを含め何人ですか？

- | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|---------|
| 1. 1人 | 2. 2人 | 3. 3人 | 4. 4人 | 5. 5人以上 |
|-------|-------|-------|-------|---------|

問04 あなたのお住まいはどの地区ですか？

- | | | | | | | |
|-------|--------|---------|-------------|---------|--------|--------|
| 1. 原 | 2. 蚊野 | 3. 蚊野茶屋 | 4. ピュアタウン蚊野 | 5. 松ヶ原 | 6. 野篠 | |
| 7. 矢野 | 8. 玉城苑 | 9. 積良 | 10. 山神 | 11. 田宮寺 | 12. 勝田 | 13. 浜塚 |

問05 あなたのお仕事はどれですか？当てはまるものをいくつでもお答えください。

- | | | | | |
|-------------|--------------|-------------------|--------|--------|
| 1. 農業 | 2. 林業 | 3. 漁業 | 4. 自営業 | 5. 会社員 |
| 6. 公務員・団体職員 | 7. パート・アルバイト | 8. 専業主婦（主夫） | | |
| 9. 中学生 | 10. 高校生・高専生 | 11. 大学生・短大生・専門学校生 | | |
| 12. 無職 | 13. その他（ | ） | | |

問 06 日常生活について不安に感じていること、困っていることはありますか？当てはまるものいくつかでもお答えください。

1. 食事作り、洗濯、ゴミ出し等の日常生活のこと
2. 庭作業（草取り）、電球の交換等の軽作業のこと
3. 農地、山林の維持管理に関すること
4. 日常的な相談をする相手がいないこと
5. 看病や世話をしてくれる人がいないこと
6. 健康面への不安があること
7. 緊急時の相談先になってくれる人がいないこと
8. 災害への備えや避難に関すること
9. 自家用車の運転に不安があること
10. 買い物・通院等の移動手段（交通手段）のこと
11. 生活道路等の環境整備に関すること
12. 食品・生活用品の買い物に関すること
13. 身近に預貯金を引き出せる金融機関がないこと
14. 福祉サービス（デイサービス・介護施設）等に関すること
15. 病院までの距離等、地区の医療体制に関すること
16. 子育て環境に関すること
17. 仲間と気軽に集まる場所がないこと
18. 学校が遠く、通学が不便であること
19. 小学校が少人数であり、学習面での競争が少ないこと
20. 進学に関すること
21. 結婚に関すること
22. 仕事、雇用、就職に関すること
23. その他（ ）



いくつでも
お答えください

問 07 日常の主な交通手段を教えてください。

- | | | | | |
|--------|-----------|---------|----------|--------|
| 1. 自動車 | 2. バイク・原付 | 3. 路線バス | 4. タクシー | 5. 自転車 |
| 6. 徒歩 | 7. 元気バス | 8. JR | 9. その他 (|) |

(2) 地域活動について教えてください。

※地域活動とは、地区の活動や共同作業、まちづくり活動や NPO、ボランティア等の活動、まつり、行事、イベント等全般を指します。

問 08 あなたは地域活動に関心がありますか？

- | | |
|-------|--------|
| 1. はい | 2. いいえ |
|-------|--------|

問 09 あなたは地域活動に参加していますか？

- | | |
|--------------------|-------------------|
| 1. 参加している | 2. どちらかというに参加している |
| 3. どちらかというに参加していない | 4. 参加していない |

問 10 問 09 で答えた理由を 3 つまで 教えてください。

① 「参加している」「どちらかというに参加している」とご回答頂いた方

- | |
|------------------------|
| 1. やりがいがあるから楽しいから |
| 2. 誰かの役に立てるから |
| 3. 知り合いや仲間が増えるから |
| 4. 時間的に余裕があるから |
| 5. 義務だと思うから |
| 6. 参加しないと周りの目が気になるから |
| 7. 地区の人との付き合いを大事にしたいから |
| 8. 人に頼まれたから |
| 9. その他 (|

3 つまで
お答えください

② 「参加していない」「どちらかというに参加していない」とご回答頂いた方

1. 仕事・学業等で時間的に余裕がない
2. お金がかかりそうだから
3. 人間関係が面倒そうだから
4. 知り合いがいないから
5. 体力がないから
6. 自分では役に立たないと思うから
7. 家族が参加しているから
8. 興味がないから
9. 意見を聞いてもらえないから
10. 地域活動に参加する意義を感じないから
11. その他

3つまで
お答えください



(3) まちづくりの「大切さ」「満足度」について教えてください。

問 11 次のテーマ・内容についてあなたがこれから先のまちづくりには「大切だ」と思うもの、そして地区の現状や取り組み、町の施策への「満足度」を教えてください。

① 高齢者の健康と長生きに関すること

(キーワード 健康づくり、買い物・通院等の支援、見守り、配食サービス等)

大切だと思うか	1. そう思う	2. そう思わない	3. わからない
満足しているか	1. 満足だ	2. 満足ではない	3. わからない

② 子育て支援等、子どもに関することについて

(キーワード 親同士の交流、子ども会、登下校の見守り等)

大切だと思うか	1. そう思う	2. そう思わない	3. わからない
満足しているか	1. 満足だ	2. 満足ではない	3. わからない

③ 自分たちの住んでいる地区の環境について

(キーワード 草刈り、側溝そうじ、公園・河川・集会所等の美化等)

大切だと思うか	1. そう思う	2. そう思わない	3. わからない
満足しているか	1. 満足だ	2. 満足ではない	3. わからない

④ 生きがい、趣味等の活動について

(キーワード 地区でのスポーツ活動(運動会等)、趣味の教室、サークル活動等)

大切だと思うか	1. そう思う	2. そう思わない	3. わからない
満足しているか	1. 満足だ	2. 満足ではない	3. わからない

⑤ 空き家、耕作放棄地等のことについて

(キーワード 維持管理、活用、持ち主や状況の把握、空き家バンク、あっせん等)

大切だと思うか	1. そう思う	2. そう思わない	3. わからない
満足しているか	1. 満足だ	2. 満足ではない	3. わからない

⑥ 防災、防犯、交通安全等「安全・安心」に関わることについて

(キーワード 地震、水害、火事、避難訓練、交通マナー等)

大切だと思うか	1. そう思う	2. そう思わない	3. わからない
満足しているか	1. 満足だ	2. 満足ではない	3. わからない

⑦ 地区でのコミュニケーションについて

(キーワード 地区での付き合い、回覧板、掲示板、広報誌等)

大切だと思うか	1. そう思う	2. そう思わない	3. わからない
満足しているか	1. 満足だ	2. 満足ではない	3. わからない

⑧ 地区の魅力を見つけ、世代や地区を越えて発信することについて

(キーワード 特産物、収穫体験、史跡、自然環境等)

大切だと思うか	1. そう思う	2. そう思わない	3. わからない
満足しているか	1. 満足だ	2. 満足ではない	3. わからない

⑨ 地区の伝統を守り、伝えることについて

(キーワード 祭り、祭礼、年中行事、伝統行事、芸能等)

大切だと思うか	1. そう思う	2. そう思わない	3. わからない
満足しているか	1. 満足だ	2. 満足ではない	3. わからない

(4) あなたは今後もこの地区に住み続けたいですか？

問 12 あなたはこの地区に今後も住み続けたいと思いますか？

1. そう思う 2. そう思わない 3. わからない

よろしければ、その理由をお聞かせください（自由記載）

--

問 13 あなたは自分の子どもにもこの地区に住んでほしいと思いますか？（子どもがいない方も「もし子どもがいたら」と考えてお答えください）

1. そう思う 2. 思わない 3. わからない

よろしければ、その理由をお聞かせください（自由記載）

--

問 14 あなたはこの地区に愛着がありますか？

1. ある 2. ない 3. わからない

よろしければ、その理由をお聞かせください（自由記載）

--

問 15 玉城町が下外城田地区の未来を考える事業を昨年度から行っていることを知っていましたか？

- | | |
|----------|-----------|
| 1. 知っていた | 2. 知らなかった |
|----------|-----------|

問 16 地区での暮らしや地域活動・事業等についてお感じのことやご意見ご提案をご自由にお書きください。(自由記載)



アンケートは以上です。この度はお忙しいところ貴重な時間を割いてアンケートにご協力いただき誠にありがとうございました。アンケートの集計・分析結果はみなさんに報告させていただきます。よろしくお願いいたします。

```
GET
^ FILE='/Users/ikeyamaatsushi/Dropbox/ 皇學館/R02/R02TMKミ ライ デザイン/ まちづくり
アンケート/2020全体.sav'.
DATASET^NAME^データセット1^WINDOW=FRONT.

SAVE^OUTFILE='/Users/ikeyamaatsushi/Dropbox/ 皇學館/R03TMKミ ライ デザインPJ/ まち
づくりアンケート/2021山神.sav'
^/COMPRESSED.
DATASET^ACTIVATE^データセット1.

SAVE^OUTFILE='/Users/ikeyamaatsushi/Dropbox/ 皇學館/R03TMKミ ライ デザインPJ/ まち
づくりアンケート/2021山神.sav'
^/COMPRESSED.
FREQUENCIES ^VARIABLES= Q01^Q02^Q03^Q04^Q0501^Q0502^Q0503^Q0504^Q0505^Q50
6^Q0507^Q0508^Q0509^Q0510
■ Q0511^Q0512^Q0513^Q0601^Q0602^Q0603^Q0604^Q0605^Q0606^Q0607^Q0608^Q0
609^Q0610^Q0611^Q0612^Q0613
■ Q0614^Q0615^Q0616^Q0617^Q0618^Q0619^Q0620^Q0621^Q0622^Q0623^Q0701^Q0
8^Q09^Q1001^Q1002^Q1003^Q1004
■ Q1005^Q1006^Q1007^Q1008^Q1009^Q1011^Q1012^Q1013^Q1014^Q1015^Q1016^Q1
017^Q1018^Q1019^Q1020^Q1021
■ Q1101^Q1102^Q1103^Q1104^Q1105^Q1106^Q1107^Q1108^Q1109^Q1110^Q1111^Q1
112^Q1113^Q1114^Q1115^Q1116
■ Q1117^Q1118^Q1201^Q1301^Q1401
^/ORDER= ANALYSIS.
```

度数分布表

記録

出力の作成日付		03-MAR-2022 14:41 ...
コメント		
入力	データ	/Users/ikeyamaatsushi/ Dropbox/ 皇學館 /R03TMKミライデザイン PJ/まちづくりアンケート /2021山神.sav
	アクティブ データ セット	データセット1
	フィルタ	< な し >
	重み付け	< な し >
	分割ファイル	< な し >
	作業データファイル 内の行数	84
欠損値の取り扱い	欠損の定義	ユーザー定義欠損値は欠 損値として処理されま す。
	使用されたケース	統計量は、有効なデー タのすべてのケースに基 づいています。
シンタックス		FREQUENCIES VARIABLES=Q01 Q02 Q03 Q04 Q0501 Q0502 Q0503 Q0504 Q0505 Q0506 Q0507 Q0508 Q0509 Q0510 Q0511 Q0512 Q0513 Q0601 Q0602 Q0603 Q0604 Q0605 Q0606 Q0607 Q0608 Q0609 Q0610 Q0611 Q0612 Q0613 Q0614 Q0615 Q0616 Q0617 Q0618 Q0619 Q0620 Q0621 Q0622 Q0623 Q0701 Q08 Q09 Q1001 Q1002 Q1003 Q1004 Q1005 Q1006 Q1007 Q1008 Q1009 Q1011 Q1012 Q1013 Q1014 Q1015 Q1016 Q1017 Q1018 Q1019 Q1020 Q1021 Q1101 Q1102 Q1103 Q1104 Q1105 Q1106 Q1107 Q1108 Q1109 Q1110 Q1111 Q1112 Q1113 Q1114 Q1115 Q1116 Q1117 Q1118 Q1201 Q1301 Q1401 /ORDER=ANALYSIS.
リソース	プロセッサ時間	00:00:00.03
	経過時間	00:00:00.00

[illegible]

性別

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 女性	46	54.8	54.8	54.8
男性	38	45.2	45.2	100.0
合計	84	100.0	100.0	

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	10歳代	5	6.0	6.0	6.0
	20歳代	3	3.6	3.6	9.5
	30歳代	6	7.1	7.1	16.7
	40歳代	6	7.1	7.1	23.8
	50歳代	14	16.7	16.7	40.5
	60歳代	20	23.8	23.8	64.3
	70歳代	18	21.4	21.4	85.7
	80歳代以上	12	14.3	14.3	100.0
	合計	84	100.0	100.0	

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1人	6	7.1	7.3	7.3
	2人	29	34.5	35.4	42.7
	3人	16	19.0	19.5	62.2
	4人	12	14.3	14.6	76.8
	5人以上	19	22.6	23.2	100.0
	合計	82	97.6	100.0	
欠損値	システム欠損値	2	2.4		
合計		84	100.0		

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 岩出	82	97.6	100.0	100.0
欠損値 システム欠損値	2	2.4		
合計	84	100.0		

&[ページ タイトル]

農業

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	27	32.1	73.0	73.0
	1	10	11.9	27.0	100.0
	合計	37	44.0	100.0	
欠損値	システム欠損値	47	56.0		
合計		84	100.0		

林業

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	34	40.5	100.0	100.0
欠損値	システム欠損値	50	59.5		
合計		84	100.0		

漁業

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	34	40.5	100.0	100.0
欠損値	システム欠損値	50	59.5		
合計		84	100.0		

自営業

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	30	35.7	78.9	78.9
	1	8	9.5	21.1	100.0
	合計	38	45.2	100.0	
欠損値	システム欠損値	46	54.8		
合計		84	100.0		

会社員

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	28	33.3	62.2	62.2
	1	17	20.2	37.8	100.0
	合計	45	53.6	100.0	
欠損値	システム欠損値	39	46.4		
合計		84	100.0		

&[ページ タイトル]

公務員・団体職員

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 0	34	40.5	100.0	100.0
欠損値 システム欠損値	50	59.5		
合計	84	100.0		

パート・アルバイト

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 0	31	36.9	75.6	75.6
1	10	11.9	24.4	100.0
合計	41	48.8	100.0	
欠損値 システム欠損値	43	51.2		
合計	84	100.0		

専業主婦・主夫

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 0	33	39.3	78.6	78.6
1	9	10.7	21.4	100.0
合計	42	50.0	100.0	
欠損値 システム欠損値	42	50.0		
合計	84	100.0		

中学生

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 0	34	40.5	97.1	97.1
1	1	1.2	2.9	100.0
合計	35	41.7	100.0	
欠損値 システム欠損値	49	58.3		
合計	84	100.0		

高校生

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 0	33	39.3	91.7	91.7
1	3	3.6	8.3	100.0
合計	36	42.9	100.0	
欠損値 システム欠損値	48	57.1		
合計	84	100.0		

&[ページ タイトル]

大学生・短大・専門学校

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	33	39.3	91.7	91.7
	1	3	3.6	8.3	100.0
	合計	36	42.9	100.0	
欠損値	システム欠損値	48	57.1		
合計		84	100.0		

無職

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	22	26.2	44.9	44.9
	1	27	32.1	55.1	100.0
	合計	49	58.3	100.0	
欠損値	システム欠損値	35	41.7		
合計		84	100.0		

その他

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	33	39.3	97.1	97.1
	1	1	1.2	2.9	100.0
	合計	34	40.5	100.0	
欠損値	システム欠損値	50	59.5		
合計		84	100.0		

困りごと・食事

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	30	35.7	76.9	76.9
	1	9	10.7	23.1	100.0
	合計	39	46.4	100.0	
欠損値	システム欠損値	45	53.6		
合計		84	100.0		

庭作業等

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	29	34.5	69.0	69.0
	1	13	15.5	31.0	100.0
	合計	42	50.0	100.0	
欠損値	システム欠損値	42	50.0		
合計		84	100.0		

農地山林の維持管理

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	17	20.2	31.5	31.5
	1	37	44.0	68.5	100.0
	合計	54	64.3	100.0	
欠損値	システム欠損値	30	35.7		
合計		84	100.0		

日常的な相談

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	32	38.1	86.5	86.5
	1	5	6.0	13.5	100.0
	合計	37	44.0	100.0	
欠損値	システム欠損値	47	56.0		
合計		84	100.0		

看病や世話

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	33	39.3	91.7	91.7
	1	3	3.6	8.3	100.0
	合計	36	42.9	100.0	
欠損値	システム欠損値	48	57.1		
合計		84	100.0		

健康面の不安

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	29	34.5	74.4	74.4
	1	10	11.9	25.6	100.0
	合計	39	46.4	100.0	
欠損値	システム欠損値	45	53.6		
合計		84	100.0		

緊急時の相談先

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	34	40.5	100.0	100.0
欠損値	システム欠損値	50	59.5		
合計		84	100.0		

&[ページ タイトル]

災害への備え

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	32	38.1	80.0	80.0
	1	8	9.5	20.0	100.0
	合計	40	47.6	100.0	
欠損値	システム欠損値	44	52.4		
合計		84	100.0		

運転

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	34	40.5	89.5	89.5
	1	4	4.8	10.5	100.0
	合計	38	45.2	100.0	
欠損値	システム欠損値	46	54.8		
合計		84	100.0		

移動手段

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	33	39.3	82.5	82.5
	1	7	8.3	17.5	100.0
	合計	40	47.6	100.0	
欠損値	システム欠損値	44	52.4		
合計		84	100.0		

生活道路など環境整備

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	34	40.5	87.2	87.2
	1	5	6.0	12.8	100.0
	合計	39	46.4	100.0	
欠損値	システム欠損値	45	53.6		
合計		84	100.0		

買い物

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	34	40.5	85.0	85.0
	1	6	7.1	15.0	100.0
	合計	40	47.6	100.0	
欠損値	システム欠損値	44	52.4		
合計		84	100.0		

金融機関

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	32	38.1	82.1	82.1
	1	7	8.3	17.9	100.0
	合計	39	46.4	100.0	
欠損値	システム欠損値	45	53.6		
合計		84	100.0		

福祉サービス

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	33	39.3	91.7	91.7
	1	3	3.6	8.3	100.0
	合計	36	42.9	100.0	
欠損値	システム欠損値	48	57.1		
合計		84	100.0		

地域医療体制

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	31	36.9	72.1	72.1
	1	12	14.3	27.9	100.0
	合計	43	51.2	100.0	
欠損値	システム欠損値	41	48.8		
合計		84	100.0		

子育て環境

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	34	40.5	97.1	97.1
	1	1	1.2	2.9	100.0
	合計	35	41.7	100.0	
欠損値	システム欠損値	49	58.3		
合計		84	100.0		

集まれる場所

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	32	38.1	80.0	80.0
	1	8	9.5	20.0	100.0
	合計	40	47.6	100.0	
欠損値	システム欠損値	44	52.4		
合計		84	100.0		

通学が不便

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	34	40.5	91.9	91.9
	1	3	3.6	8.1	100.0
	合計	37	44.0	100.0	
欠損値	システム欠損値	47	56.0		
合計		84	100.0		

小学校が少人数

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	33	39.3	97.1	97.1
	1	1	1.2	2.9	100.0
	合計	34	40.5	100.0	
欠損値	システム欠損値	50	59.5		
合計		84	100.0		

進学に関すること

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	34	40.5	100.0	100.0
欠損値	システム欠損値	50	59.5		
合計		84	100.0		

結婚に関すること

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	32	38.1	91.4	91.4
	1	3	3.6	8.6	100.0
	合計	35	41.7	100.0	
欠損値	システム欠損値	49	58.3		
合計		84	100.0		

雇用

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	34	40.5	82.9	82.9
	1	7	8.3	17.1	100.0
	合計	41	48.8	100.0	
欠損値	システム欠損値	43	51.2		
合計		84	100.0		

&[ページ タイトル]

その他

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	33	39.3	86.8	86.8
	1	5	6.0	13.2	100.0
	合計	38	45.2	100.0	
欠損値	システム欠損値	46	54.8		
合計		84	100.0		

主な交通手段

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	自動車	69	82.1	88.5	88.5
	自転車	1	1.2	1.3	89.7
	徒歩	1	1.2	1.3	91.0
	元気バス	5	6.0	6.4	97.4
	JR	2	2.4	2.6	100.0
	合計	78	92.9	100.0	
欠損値	システム欠損値	6	7.1		
合計		84	100.0		

地域活動への興味

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	興味あり	51	60.7	63.7	63.7
	興味なし	28	33.3	35.0	98.8
	3	1	1.2	1.3	100.0
	合計	80	95.2	100.0	
欠損値	システム欠損値	4	4.8		
合計		84	100.0		

地域活動への参加

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	参加している	29	34.5	35.8	35.8
	どちらかというに参加している	19	22.6	23.5	59.3
	どちらかというに参加していない	14	16.7	17.3	76.5
	参加していない	19	22.6	23.5	100.0
	合計	81	96.4	100.0	
欠損値	システム欠損値	3	3.6		
合計		84	100.0		

やりがいがあつて楽しいから

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	19	22.6	73.1	73.1
	1	7	8.3	26.9	100.0
	合計	26	31.0	100.0	
欠損値	システム欠損値	58	69.0		
合計		84	100.0		

誰かの役に立てるから

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	16	19.0	55.2	55.2
	1	13	15.5	44.8	100.0
	合計	29	34.5	100.0	
欠損値	システム欠損値	55	65.5		
合計		84	100.0		

知り合いや仲間が増えるから

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	14	16.7	48.3	48.3
	1	15	17.9	51.7	100.0
	合計	29	34.5	100.0	
欠損値	システム欠損値	55	65.5		
合計		84	100.0		

時間的に余裕があるから

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	18	21.4	72.0	72.0
	1	7	8.3	28.0	100.0
	合計	25	29.8	100.0	
欠損値	システム欠損値	59	70.2		
合計		84	100.0		

義務だと思うから

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	7	8.3	21.2	21.2
	1	26	31.0	78.8	100.0
	合計	33	39.3	100.0	
欠損値	システム欠損値	51	60.7		
合計		84	100.0		

参加しないと周りの目が気になるから

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	18	21.4	72.0	72.0
	1	7	8.3	28.0	100.0
	合計	25	29.8	100.0	
欠損値	システム欠損値	59	70.2		
合計		84	100.0		

地区の人との付き合いを大事にしたいから

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	5	6.0	13.2	13.2
	1	33	39.3	86.8	100.0
	合計	38	45.2	100.0	
欠損値	システム欠損値	46	54.8		
合計		84	100.0		

人に頼まれたから

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	21	25.0	91.3	91.3
	1	2	2.4	8.7	100.0
	合計	23	27.4	100.0	
欠損値	システム欠損値	61	72.6		
合計		84	100.0		

その他

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	21	25.0	100.0	100.0
欠損値	システム欠損値	63	75.0		
合計		84	100.0		

仕事・学業等で時間的に余裕がない

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	9	10.7	37.5	37.5
	1	15	17.9	62.5	100.0
	合計	24	28.6	100.0	
欠損値	システム欠損値	60	71.4		
合計		84	100.0		

&[ページ タイトル]

お金がかかりそうだから

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	13	15.5	100.0	100.0
欠損値	システム欠損値	71	84.5		
合計		84	100.0		

人間関係が面倒そうだから

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	13	15.5	76.5	76.5
	1	4	4.8	23.5	100.0
	合計	17	20.2	100.0	
欠損値	システム欠損値	67	79.8		
合計		84	100.0		

知り合いがいないから

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	11	13.1	78.6	78.6
	1	3	3.6	21.4	100.0
	合計	14	16.7	100.0	
欠損値	システム欠損値	70	83.3		
合計		84	100.0		

体力がないから

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	11	13.1	78.6	78.6
	1	3	3.6	21.4	100.0
	合計	14	16.7	100.0	
欠損値	システム欠損値	70	83.3		
合計		84	100.0		

自分では役に立たないと思うから

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	10	11.9	66.7	66.7
	1	5	6.0	33.3	100.0
	合計	15	17.9	100.0	
欠損値	システム欠損値	69	82.1		
合計		84	100.0		

家族が参加しているから

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	12	14.3	63.2	63.2
	1	7	8.3	36.8	100.0
	合計	19	22.6	100.0	
欠損値	システム欠損値	65	77.4		
合計		84	100.0		

興味がないから

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	8	9.5	47.1	47.1
	1	9	10.7	52.9	100.0
	合計	17	20.2	100.0	
欠損値	システム欠損値	67	79.8		
合計		84	100.0		

意見を聞いてもらえないから

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	13	15.5	100.0	100.0
欠損値	システム欠損値	71	84.5		
合計		84	100.0		

地域活動に参加する意義を感じないから

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	12	14.3	85.7	85.7
	1	2	2.4	14.3	100.0
	合計	14	16.7	100.0	
欠損値	システム欠損値	70	83.3		
合計		84	100.0		

その他

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	12	14.3	80.0	80.0
	1	3	3.6	20.0	100.0
	合計	15	17.9	100.0	
欠損値	システム欠損値	69	82.1		
合計		84	100.0		

重要度・高齢者の健康と長生きに関すること

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	そう思う	68	81.0	84.0	84.0
	その思わない	2	2.4	2.5	86.4
	わからない	11	13.1	13.6	100.0
	合計	81	96.4	100.0	
欠損値	システム欠損値	3	3.6		
合計		84	100.0		

満足度・高齢者の健康と長生きに関すること

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	満足だ	20	23.8	24.7	24.7
	満足ではない	13	15.5	16.0	40.7
	わからない	48	57.1	59.3	100.0
	合計	81	96.4	100.0	
欠損値	システム欠損値	3	3.6		
合計		84	100.0		

重要度・子育て支援等、子どもに関することについて

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	そう思う	56	66.7	77.8	77.8
	その思わない	4	4.8	5.6	83.3
	わからない	12	14.3	16.7	100.0
	合計	72	85.7	100.0	
欠損値	システム欠損値	12	14.3		
合計		84	100.0		

満足度・子育て支援等、子どもに関することについて

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	満足だ	15	17.9	22.1	22.1
	満足ではない	11	13.1	16.2	38.2
	わからない	42	50.0	61.8	100.0
	合計	68	81.0	100.0	
欠損値	システム欠損値	16	19.0		
合計		84	100.0		

重要度・自分たちの住んでいる地区の環境について

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	そう思う	69	82.1	85.2	85.2
	わからない	12	14.3	14.8	100.0
	合計	81	96.4	100.0	
欠損値	システム欠損値	3	3.6		
合計		84	100.0		

満足度・自分たちの住んでいる地区の環境について

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	満足だ	35	41.7	43.2	43.2
	満足ではない	20	23.8	24.7	67.9
	わからない	26	31.0	32.1	100.0
	合計	81	96.4	100.0	
欠損値	システム欠損値	3	3.6		
合計		84	100.0		

重要度・生きがい、趣味等の活動について

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	そう思う	55	65.5	67.1	67.1
	その思わない	9	10.7	11.0	78.0
	わからない	18	21.4	22.0	100.0
	合計	82	97.6	100.0	
欠損値	システム欠損値	2	2.4		
合計		84	100.0		

満足度・生きがい、趣味等の活動について

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	満足だ	22	26.2	27.2	27.2
	満足ではない	11	13.1	13.6	40.7
	わからない	48	57.1	59.3	100.0
	合計	81	96.4	100.0	
欠損値	システム欠損値	3	3.6		
合計		84	100.0		

重要度・空き家、耕作放棄地等のことについて

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	そう思う	63	75.0	77.8	77.8
	その思わない	5	6.0	6.2	84.0
	わからない	13	15.5	16.0	100.0
	合計	81	96.4	100.0	
欠損値	システム欠損値	3	3.6		
合計		84	100.0		

満足度・空き家、耕作放棄地等のことについて

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	満足だ	5	6.0	6.3	6.3
	満足ではない	37	44.0	46.3	52.5
	わからない	38	45.2	47.5	100.0
	合計	80	95.2	100.0	
欠損値	システム欠損値	4	4.8		
合計		84	100.0		

重要度・防災、防犯、交通安全等「安全・安心」に関わることについて

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	そう思う	73	86.9	91.3	91.3
	その思わない	1	1.2	1.3	92.5
	わからない	6	7.1	7.5	100.0
	合計	80	95.2	100.0	
欠損値	システム欠損値	4	4.8		
合計		84	100.0		

満足度・防災、防犯、交通安全等「安全・安心」に関わることについて

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	満足だ	24	28.6	30.8	30.8
	満足ではない	22	26.2	28.2	59.0
	わからない	32	38.1	41.0	100.0
	合計	78	92.9	100.0	
欠損値	システム欠損値	6	7.1		
合計		84	100.0		

重要度・地区でのコミュニケーションについて

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	そう思う	66	78.6	83.5	83.5
	その思わない	6	7.1	7.6	91.1
	わからない	7	8.3	8.9	100.0
	合計	79	94.0	100.0	
欠損値	システム欠損値	5	6.0		
合計		84	100.0		

満足度・地区でのコミュニケーションについて

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	満足だ	40	47.6	51.9	51.9
	満足ではない	14	16.7	18.2	70.1
	わからない	23	27.4	29.9	100.0
	合計	77	91.7	100.0	
欠損値	システム欠損値	7	8.3		
合計		84	100.0		

重要度・地区の魅力を見つけ、世代や地区を越えて発信することについて

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	そう思う	52	61.9	67.5	67.5
	その思わない	8	9.5	10.4	77.9
	わからない	17	20.2	22.1	100.0
	合計	77	91.7	100.0	
欠損値	システム欠損値	7	8.3		
合計		84	100.0		

満足度・地区の魅力を見つけ、世代や地区を越えて発信することについて

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	満足だ	14	16.7	18.4	18.4
	満足ではない	17	20.2	22.4	40.8
	わからない	45	53.6	59.2	100.0
	合計	76	90.5	100.0	
欠損値	システム欠損値	8	9.5		
合計		84	100.0		

重要度・地区の伝統を守り、伝えることについて

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	そう思う	56	66.7	70.9	70.9
	その思わない	8	9.5	10.1	81.0
	わからない	15	17.9	19.0	100.0
	合計	79	94.0	100.0	
欠損値	システム欠損値	5	6.0		
合計		84	100.0		

満足度・地区の伝統を守り、伝えることについて

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	満足だ	26	31.0	33.8	33.8
	満足ではない	19	22.6	24.7	58.4
	わからない	32	38.1	41.6	100.0
	合計	77	91.7	100.0	
欠損値	システム欠損値	7	8.3		
合計		84	100.0		

あなたはこの地区に今後も住み続けたいと思いますか？

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	そう思う	54	64.3	66.7	66.7
	その思わない	7	8.3	8.6	75.3
	わからない	20	23.8	24.7	100.0
	合計	81	96.4	100.0	
欠損値	システム欠損値	3	3.6		
合計		84	100.0		

あなたは自分の子どもにもこの地区に住んでほしいと思いますか？（子どもがいない方も
「もし子どもがいたら」と考えてお答えください）

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	そう思う	29	34.5	35.8	35.8
	その思わない	22	26.2	27.2	63.0
	わからない	30	35.7	37.0	100.0
	合計	81	96.4	100.0	
欠損値	システム欠損値	3	3.6		
合計		84	100.0		

&[ページ タイトル]

あなたはこの地区に愛着がありますか？

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	そう思う	49	58.3	61.3	61.3
	その思わない	9	10.7	11.3	72.5
	わからない	22	26.2	27.5	100.0
	合計	80	95.2	100.0	
欠損値	システム欠損値	4	4.8		
合計		84	100.0		

TMK ミライデザインプロジェクト

令和3年度 第17号 玉城町明るい未来づくりに関する調査研究業務報告書

令和4年3月10日発行

発行者 皇學館大学教育開発センター 准教授 池山敦